

帝國新讀本卷五

3759  
Ha7  
資料室

教  
41-  
2000

41565

教科書文庫

4
810
41-1925
20000 38643

74  
123

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

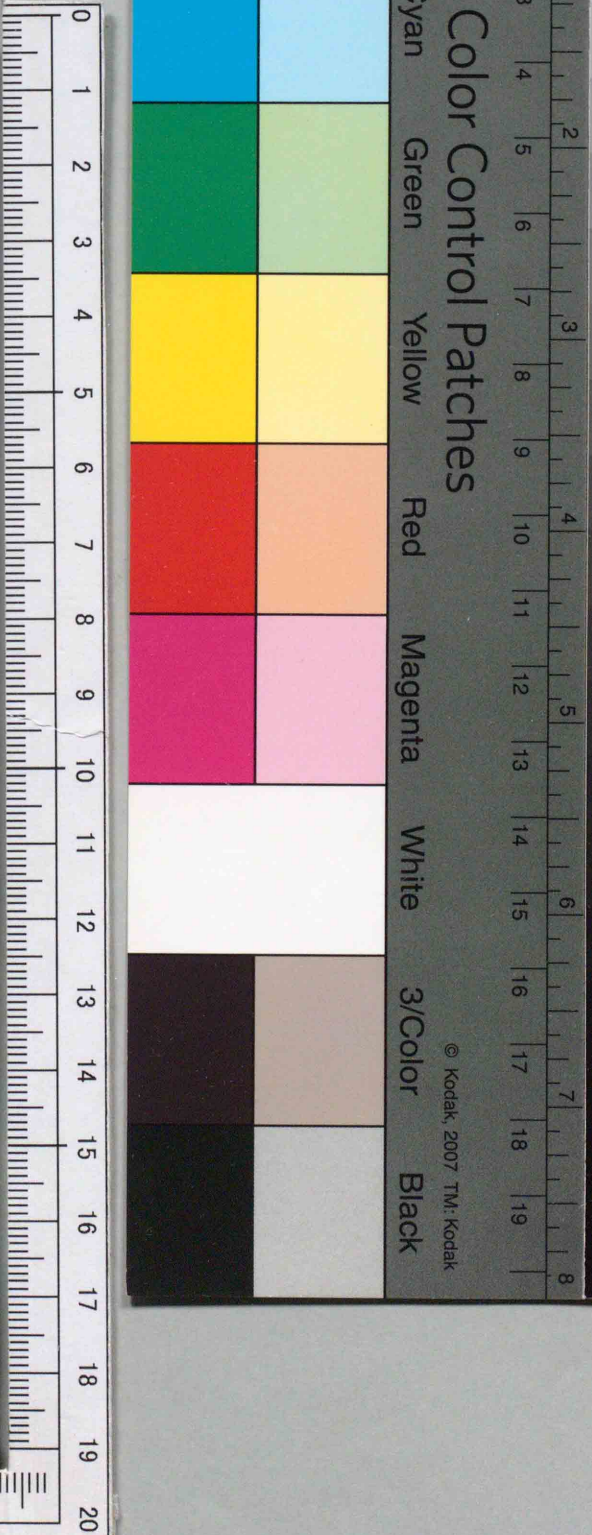


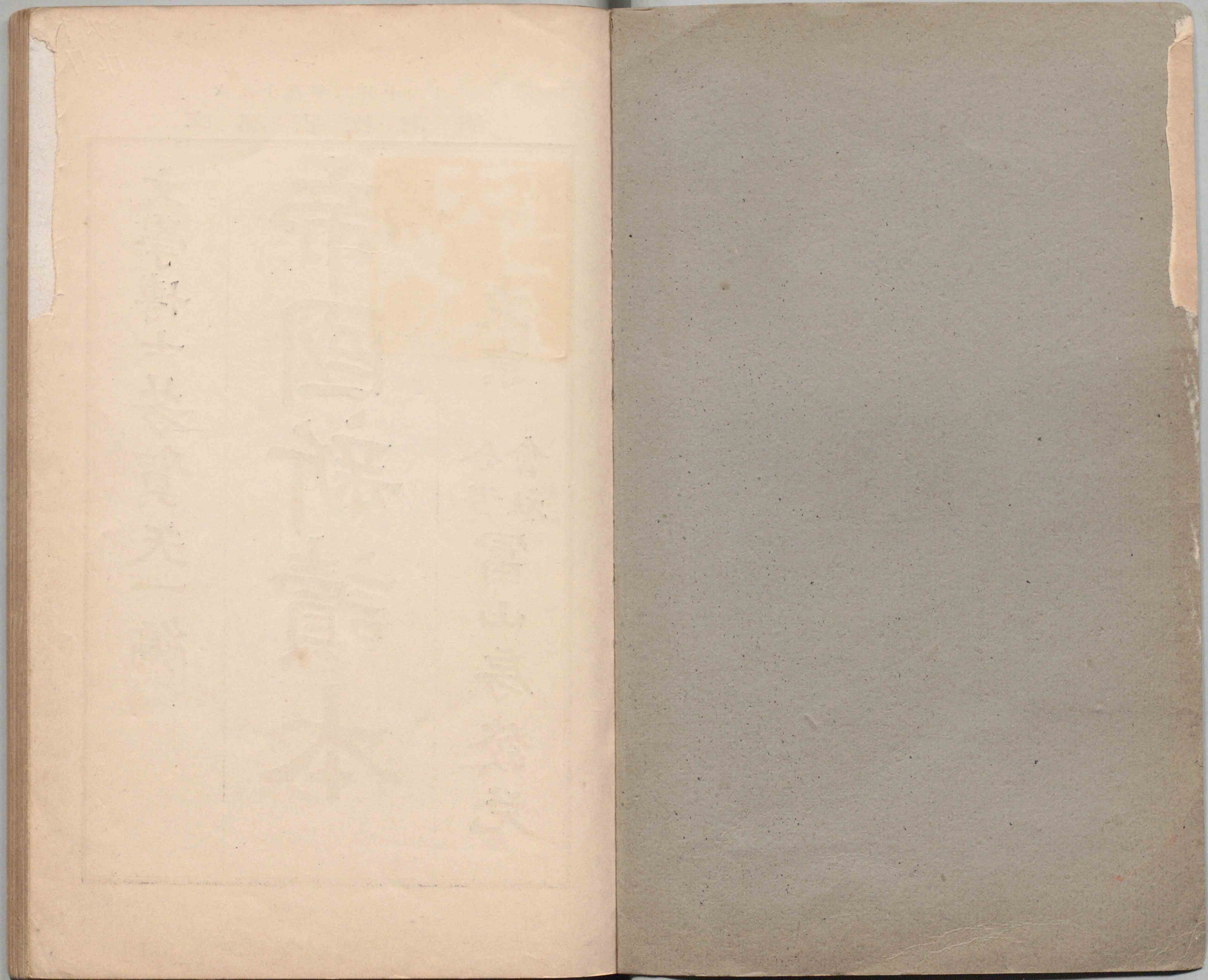
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

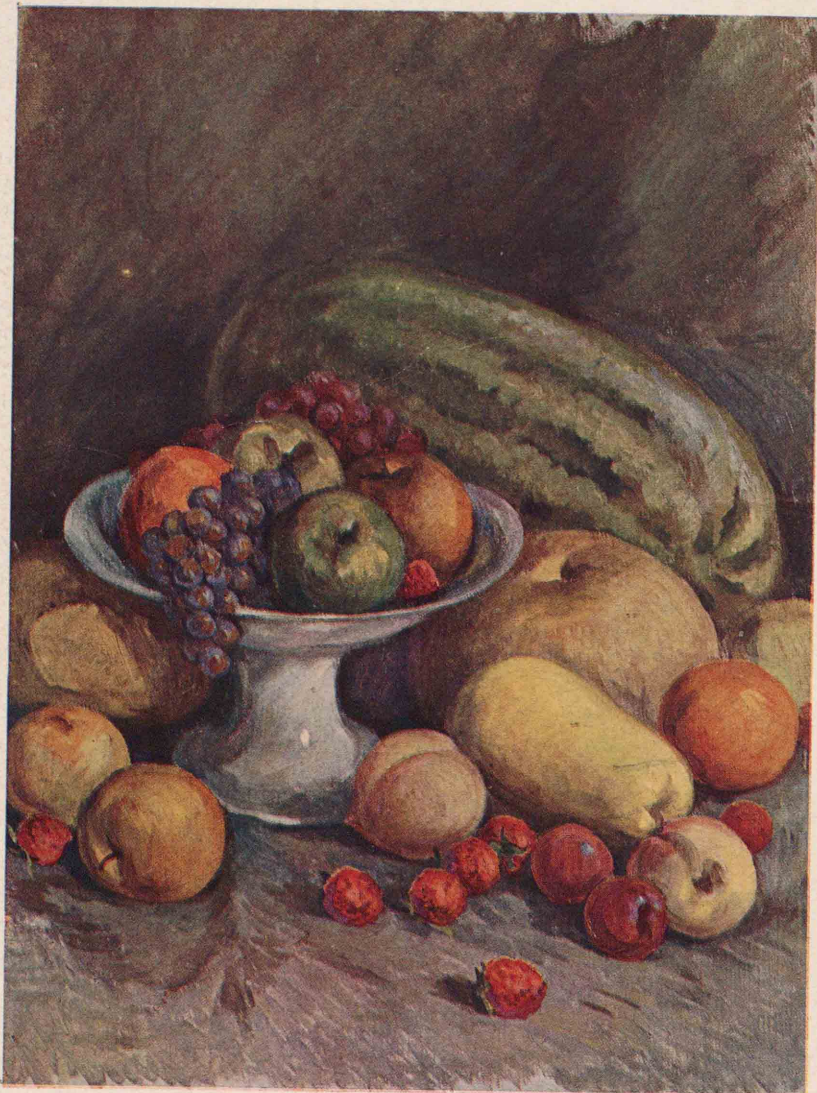
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





教科書文庫  
4  
810  
41-1925  
2000038643



物 果

一岡本歸一

資料室

375.9  
Ha7

日六十月二年四十正大

濟定檢省部文

帝國新讀本

文學博士芳賀矢一編



東京

合資會社 富山房發兌



帝國新讀本 卷五

目次

一	こち吹く風	一
二	京都御所拜觀の記	三
	あゝ尊い美の國よ(自修文)	八
三	松江の朝	二
四	吉野の行宮	六
五	光堂	三
六	頼朝と義經	九

終り、函封

目次

広島大学図書

2000038643



七	大日本國語辭典の序	三
	ここばの話(自修文)	三
八	仁和寺の法師	四
一	石清水	
二	鼎	
九	芍薬の花	四
一〇	歸り行く労働者	四
一一	土の匂	五
一二	五月雨の詩趣	五
	花を育てる心(自修文)	六
一三	箱王仇に遇ふ	六

一四	陣屋問答 その一	六
一五	陣屋問答 その二	七
一六	清 水	八
一七	果物の味はひ	八
一八	家	八
一九	平和は成れり	九
	後藤象次郎伯とクレマンソー氏(自修文)	九
二〇	帝國青年のために	一〇
二一	海洋の旅	一〇
二二	元 寇	一一
二三	「蒙古來」の詩	一一

二四	大鳴門の眺	二六
二五	生命の雄辯	一三三
二六	「悲哀の征服」(自修文)	一三九
二七	あゝ大東京	一四六
二七	百花譜	一五三
二八	實體實相	一五九
二九	みやびの物語	一六〇
一〇	秋の青柳	
二	王子猷	
三	三船の才	
三〇	日蓮上人	一六四

霧の身延(自修文)……………一七二

目次終



帝國新讀本卷五

一 一 ち吹く風

二見瀉こち吹く風に明けそめて

かみよのまゝの春は來にけり

はるの夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

見わたせば柳さくらをこきまぜて

<sup>(一)</sup> 加藤千蔭

<sup>(二)</sup> 凡河内躬恒

<sup>(三)</sup> 素性法師

一 一 ち吹く風

<sup>(一)</sup> 姓は橘・國學者・歌人・江戸  
淵の門人・賀茂  
六八年(二)文眞  
七十五年致、年  
七十五

<sup>(二)</sup> 平安時代の歌  
人・宇多・醍醐  
兩朝頃の人・醍醐

<sup>(三)</sup> 歌僧・俗稱良  
峰玄利・清和  
天皇に仕へた

(一) 歌人。尾張の人

花見つし分  
花は浅し  
雲のし  
思ひおく  
よしの山  
契

(二) 國學者。元祿十四年(一七〇三)六十一(一七〇四)六十二年歿

みやこぞ春の錦なりける

をち方の一むら霞ほのくさ

松になりゆく朝ぼらけかな



契沖筆蹟

(一) 間島冬道

霞も雨も空はわかぬ間に

つらぬきそむる青柳のいと

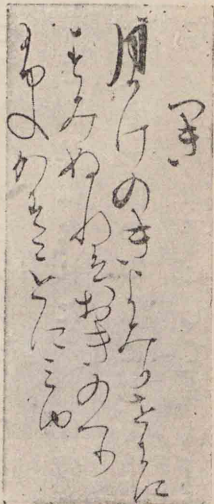
駒ごめてなほ水かはん山ぶきの

はなの露そふ井手のたま川

(二) 契沖

藤原俊成

つき  
月かけのき  
よみかせき  
にすみぬれ  
はおきのつ  
りふねかす  
ことに見ゆ



傳藤原俊成筆蹟

およみ人しらず

をしめども

春の限りの

けふの日の

夕ぐれにさへなりにけるかな

## 二 京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。我が拜觀したるは四月半頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしここ巡るに、麗かなる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。

私に承るに、皇居は初よりここにありしに、あらず。平安時代の末より、折々の里内裏となり、今より五百餘年前よりここに定まりし

殿掌

踏む足も空

里内裏



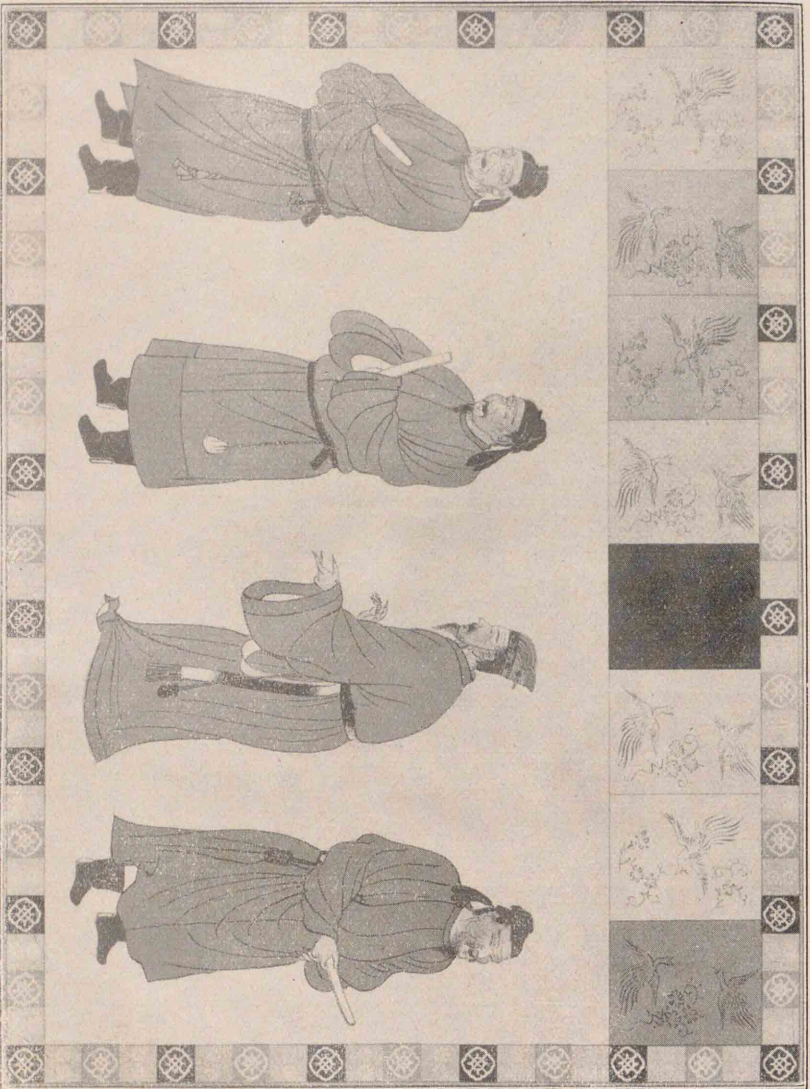
(一)孝明天皇の御代、元年は紀元二五十四年。

古くしがら  
故實

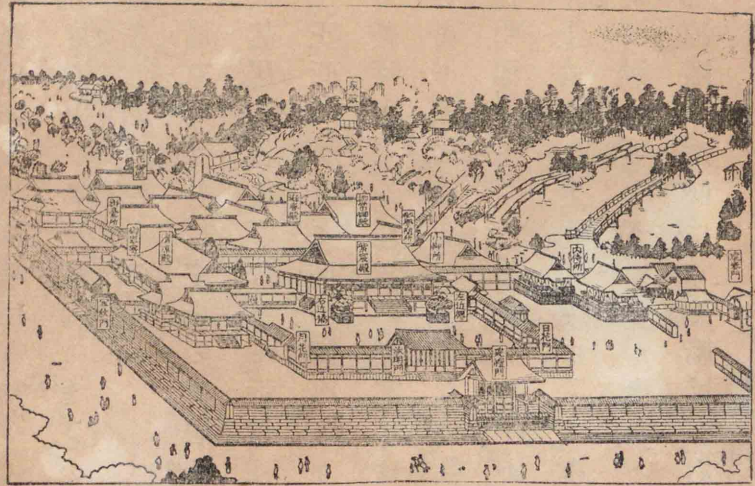
(二)有名な書家、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歴任し、官大納言に至つた。

なり。百十餘年前天明の大火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新に造營の工を起す。從來略式にのみ、なり行きし皇居も、この時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年復火災に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に從はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。紫宸殿、清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安時代の舊制に復せしものなり。今の御所も亦これに倣へるものにして、千年の昔を目のあたり見る心地す。

紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、その前に南庭あり。階前の左右に左近櫻、右近橘の二本の樹ある外は塵も留めず。今は春の日の一面に敷きつめたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明けはなれたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。殿は廣き一面の板敷にして、中に唐代の賢臣をゑがける襖あり。いはゆる賢聖障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりき。



賢聖障子



京都御所全景

といふ。明治天皇も、今の天皇陛下も、ここにて御即位の式を擧げ給ひしなり。大正四年の大典に参列せる人の語りて、この日紫宸殿上には天皇陛下の高御座、皇后陛下の御帳臺を据ゑたり。階下近く立てたる日光月光の大旛をはじめとして、紅、黄、緑、紫、幾十の大旛小旛の風に翻れるも麗しく、威儀の人の黒袍、紅袍、鉦鼓の人の緑袍にて居並びたるも厳めしかりき。回廊には大禮服の文武官、燕尾服の

衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照誠に面白く、古今東西の文化を集めたる盛觀なりき。こいひしを、今更に思ひ出でて、その御盛儀をしのび奉りぬ。

清凉殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世はたゞ上古の形を存したるなりと申す。正面の母屋に晝の御座あり、御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜御殿にて、御寢室なり。左右の別室には殿上こいひて、殿上人の宿直する所等あり。前の廣廂に立てたる衝立に、年中行事、障子、昆明池、障子あり。昆明池、障子に近く荒海、障子あり。又殿上の外の渡廊に馬形、障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱けいでて萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて、轡をゑがき加へしめられたりと傳ふるはこれなり。清凉殿は東面にして、階前左右に河竹、吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。

世移り風變る

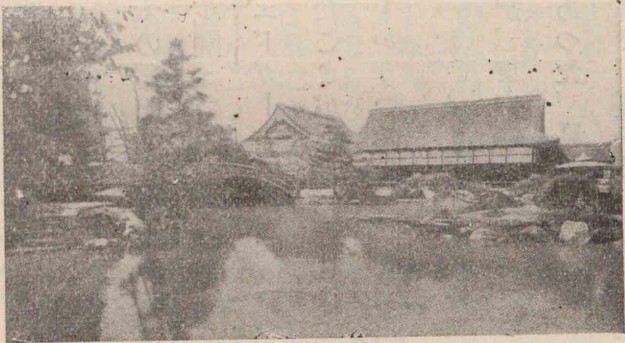
母屋  
塗籠

殿上人

年中行事

(一)昆明池は支那雲南省雲南にある。

(一)賀茂川の一  
名、一眸の中に入る  
(二)比叡山に續く  
東山連峰の北  
端



その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。いづれも近世の様式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所、折により拜謁者の階級によりて、ここかしこの別あり。常御殿は即ち都御居間を申す。その東の御庭、林泉の巧い御ふばかりなし。蟬の小川をせき入れて池をたゞへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。東山一帶亦一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意ヶ嶽の大文字の火を望み給はんがためぞ。

一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりの事を書出づるも畏しや。感動詞(よ、らー)

(一) 福井縣・ウラジワの交通點。  
 (二) Panorama. 見る者の周圍を圓形に圍んだ大きな畫布に長いつゞいた景をかき、實際の景の如く見せるもの。  
 連鎖 つゞき。  
 祖國 先祖代々屬して來た國。  
 あてやかな うつくしい。  
 (三) Emerald. 濃く緑色。  
 (四) Edgar Poe. アメリカの詩人、小説家。(西曆一八〇九年—一八四九年)  
 (五) Landschaft Garden. 實現 實際にあらはれる。  
 期待す あてにして待つてある。  
 技巧的 たくみを盡したるもの。  
 (六) Ribbon. 散點す ばつちらばつちら

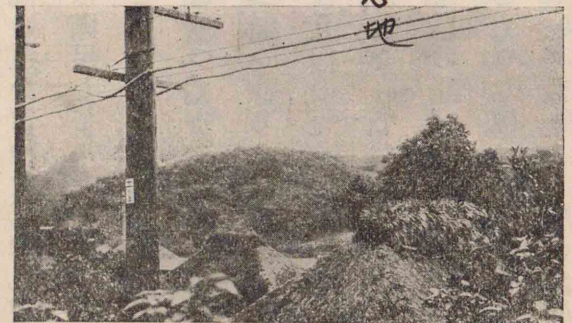
あゝ尊い美の國よ (自修文)  
 敦賀から横濱までの途中は、美しい自然のパノラマの連鎖であつた。「自然を人間の愛らしい手で、即ち祖國の爲に立派に奮闘し、又平和な労働の中で美しい完成の境に到らしめることの出來る手で、あてやかな花園に作り變へたのだ。」日本の稲田は、媚びるやうなエメラルド色をしてゐて、稲田といふよりは、寧ろ花園といふ感じを與へる。  
 エドガー・ポーは、いつかランドシャフト・ガーデンといふものの設立を夢見たことがある。それは、「自然」を、一つの大庭園に作り變へようとしたのだ。尤もかういふ企が、或國民によつて實現せられるものは、彼は期待してゐなかつた。まして、彼がその不思議なお伽話を書いてゐた當時、今いつたやうな企が、東方の一國民によつて實現せられてゐたとは、彼の思ひ及ばないところであつた。見よ、ここに一つの橋がある。それは繪のやうに技巧的ではあるが、優美で、輕快で、しかも立派に實用品となつてゐる。そこにはリボンのやうな小路があり、かしこには普通の道路がある。又その間には唐草模様などを彫刻

唐草模様 つる草のさまざまにはふやうな形のもやう。  
 散點す ばつちらばつちら

Motto. 格言・信條。

看取す 見て取る。

した小さな家が散點し、これ等の田舎家には、屋根の上にあてやかな紫色の菖蒲の花が咲いて、空中庭園をなしてゐるのさへある。  
 日本のはかうして祖國の爲に盡しながら、その求めるものを求め、世界に於ける一つの孤島を守り、この孤島を沃土としてゐる。そして純潔な歡喜に醉心地つてゐるほどであるから、よし敵であつても、自分が敵である事を忘れて、日本の爲に喜ぶであらう。  
 日本には昔三偉人に關する有名なモットーがあり、それが三つの俳句に詠まれてゐる。彼等は信長と秀吉と家康だ。信長はいつた、「鳴かぬなら殺してしまへほごごぎす」秀吉はいつた、「鳴かぬなら鳴かして見せうほごごぎす」家康はいつた、「鳴かぬなら鳴くまで待たうほごごぎす」ここ。我々はこの短い句の中に、三人の性格がはつきりと出てゐるのを看取する。そしてこの三人の性格は、いづれも日本人の國民性の中に根ざしてゐる。日本



(谷ヶ土保) 根屋たい咲の蒲菖

魅力  
人をひきつけ  
る力

〔Moscow〕  
ロシアの舊都  
であつたが、  
今はまた首都  
となつた。古  
い寺院がある  
ので殊に名高  
い。

人はどんな事があつても、自分の意志を貫徹しなければ止まない。けれども日本人は、自然の成行とその結果が凡そわかつてゐるさへすれば、いつまでも我慢強く待つてゐる。これが日本人の最高の徳で、我々が見る日本人のすべての美點はそこから發する。日本人は支那人と朝鮮人から畫の道を習つた。けれども日本人は支那人や朝鮮人を先生に仰いでゐることに満足してゐなかつた。日本人はそれが繪畫であつても、やはり日本式に歌はせることを忘れなかつた。だから日本の繪畫はどの一枚を取つて見ても、みんな歌つてゐるやうだ。その魅力に我々ヨーロッパ人は酔はされるばかりである。詩を作ることでも、日本人は支那人に學んだところが多い。しかも日本の詩は五行の短歌にしても、三行の俳句にしても、そこには日本といふものの特色が含まれてゐる。自由で廣くとした港を持つ横濱、美しい遊園とつゞいてゐる東京の騒がしい市場、鎌倉の平つたい海岸と大佛の邊の緑濃い森、立派なお寺と大きな楓と苔の多い櫻の古木に魅せられる日光、日本のモスコウである京都、その都會にはたくさんなお寺があつて、いつも鐘が鳴つてゐる。その他到る所日本は明るく鮮な面をし

純朴  
かざりがなく  
てすなほなこ  
こ。

生の喜  
この世の中に  
生きてゐる喜  
ぶかいこと。

〔Constantin Balmont〕  
ロシアの詩人  
コンスタンチ  
ン・バリモン  
トが日本へ來遊  
した時に作つ  
た詩や短文を  
集めたものを  
全冊大正十  
二年東京誠之  
堂發行

〔一〕松江市・島根  
縣廳の所在地

て、私を眺めたり迎へたりした。日本の詩人や作家と話をしても、上野公園へ私を案内してくれた純朴な車夫と話をしても、あごけない女中とむだ口を叩いても、その他私の話相手になつた誰でも、日本のすべての男女の中には、人間としての品と、大きな生の喜を感じた。この生の喜は、日本人にとつては、もう死を恐れないほど純一で、且深刻なものである。日本人はちやうど、小川や大きな川が大海に注ぐやうに、極めて落着き拂つて、死を迎へてゐる。あゝ尊い美の國よ。魔のやうな國よ。私はお前を祝福する。この國では私も幸福であつた。どんな悲みでも、それをすぐ美化し詩化し得られるのはこの國だけである。

—尾瀬敬止譯「日本を歌へる」による—

### 三 松江の朝

莫人として歸化女  
小泉 八 雲

〔一〕松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響

ハクシ、ヒマラシ

脉搏

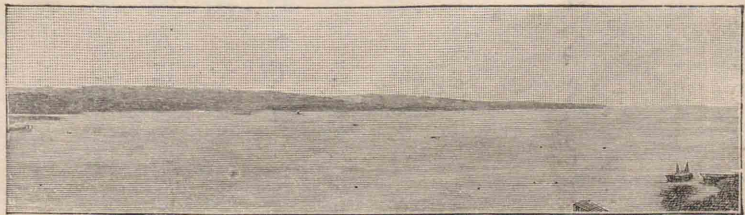
禪刹

勤行

(一)松江市を貫流する川  
萬里(二)島根縣八束郡の内海、東西四里、南北一里半

が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脉搏である。それから禪刹洞光寺の大きい鐘が、ごーんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根やい、蕪菁や蕪菁、「薪や薪」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の庭から伸びた春の若葉の軟な緑の雲ごしに、朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方でわな、くやうに萬象を映寫して、微に光つてゐる。この川は宍道湖に



(一のそ) 景 全 湖 道 宍

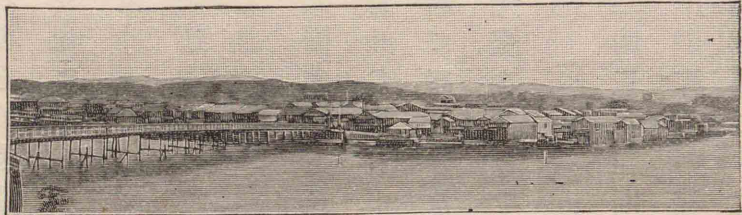
杳乎

盡端

奇を銜ふ

味爽 夜明

向かつて口を開き、湖は右手へひろがつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の家屋は、まだ戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのないものには、畫工が奇を銜つたさしか思はれないに相違ない。山さいふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに、横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霞の中に浮かぶ島嶼で、夢のやうな一帯の丘陵は、はてしの



(二のそ) 景 全 湖 道 宍

ない土手道か怪しまれる。そして霞が立つにつれて、その趣はそぞろに變つて行く。朝日の黄色な縁が見えてくる。今までのよりは更に強い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水の彼方にある高い建物の木地の色が、美しい霧の色で、蒸氣の立つ黄金色へと變る。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかしこの精靈は雲と同様、朝日の光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から、手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段をおりる男や女の姿が見える。銘々に小さな青手拭を帯に挿んで

蓬萊

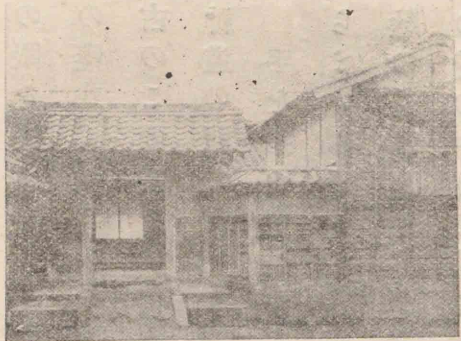
ぼやけた船の精靈

埠頭

ハトバ

潔齋 身心ヲキヨム

みて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手



小泉八雲舊邸(松江)

も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の数が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日様——天照大神を拜んでゐるからである。いとも貴き日の造主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無数の人々の衷心である。朝日に向かつて

衷心

(一) 杵築町にある  
官幣大社出雲  
大社

(二) 島根縣鏡川郡  
松江市の西方  
約六里・山陰  
線今市驛より  
山の下まで輕  
便鐵道を通ず  
る

だけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社(一)へ向かつてもさうするのである。顔を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山(二)の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ薬師如來の大伽藍のある所に向かひ、今度は佛教の儀式に随つて、掌をあはせて軽く擦る者もある。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も彼も古風な神道の祈の文句を唱へる、「祓ひ給へ、淨め給へ、とほ神カミをみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始り出し、橋の上には、からからこいふ下駄の音が、だん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞蹈の音のやうである。實際又舞蹈である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がち／＼するの、は、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、

均整

ギリシヤの古甕にゑがいた人物の足のやうに輕やかで、そして足を運ぶ時、指を先に下す。實際下駄では外にしやうがない。それは踵かかとは下駄にも着かねば、地にも着かないし、足は楔形くわいけいの木の臺を前へ傾けては進むのであつた。一足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄をはいて、親指と他の四本の指に挟んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駆けて行く。それでも躓つまずきもせず、又下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかしそれをはいた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と濶歩する。

やがて、學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏をするやう



Glimpses of Unfamiliar Japan.

(二)延元元年五月、  
(三)足利尊氏、正平十三年(一二八〇年)八月、  
相語らふ

(四)恒良親王、醍醐天皇の第六皇子、延元三年(一二九〇年)八月、  
(五)藤原實世、正平十三年(一二八〇年)五月、  
(六)新田義貞、吉野朝の忠臣、延元三年(一二九〇年)三月、  
年三十八

に見える。親船は白色や黄色の大きな翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐始める。——日本瞥見録——

### 四 吉野の行宮

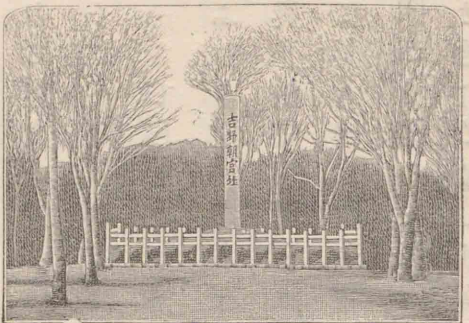
北畠親房

(二)五月にも成りぬ。  
(三)尊氏等西國の兇徒を相語らひて、かさねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸りまゐるほどに、同二十七日復山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたび／＼合戦ありしかど、官軍進まざりき。十月十日の頃にや、主上山門より還幸。いさあましましかりし事どもなれど、なほ行末を思し召す道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣を始めて、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。  
同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひ

三位以  
四位郎

(一)源顯家、吉野朝の忠臣、北畠親房の子、延元三年(一二九〇年)戦死、  
(二)義良親王、  
(三)和泉國泉北郡、  
時や到らざりけん  
(四)もろともに若の下には朽ちずして、名をばもれぬ名を見ざるぞ悲しき、(金葉集、和泉式部)

内侍所  
神鏡



吉野行宮址

しが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ひ、もこの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせ給ひ、神璽も御身に隨へ給ひけり。まことに奇特の事にこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起す輩もありき。臨幸の後には國にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。  
又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先だて申し、かさねて打上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより所々の合戦あり、また度互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ所に、戦に、時や到らざりけん、忠孝の道ここに極りにき。苔の下にもうづ

四 吉野の行宮

空しくさへなりぬ  
いふばかりなし

(一)源顯信・吉野朝の忠臣・正中戦死

節度

儲君

もれぬものにては、たゞ徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもあり  
しかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありし  
かど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國  
なる義貞も、度々召されしかど上りあへず、それ程の功させることなくて、空し  
くさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。  
さても止むべきならずとて陸奥の皇子又東へ向かはしめ給  
ふべき定めあり。(一)左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に叙せられ、陸  
奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣はされぬ。東國の官軍悉くかの節度  
に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲君皇太子に立たせ給ふべき旨申し  
聞かせ給ひて、道のほごもかたじけなかるべし。國にてはあらはさ  
せ給へ。なん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄  
も前東宮恒良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天  
命なればかたじけなし。七月の末つ方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮

おごろくし

(一)尾張國知多郡の篠島

(二)霞浦・侍

めづらか

こはし

に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め纜を解かれしに、十  
日あまりの事にや、上總の地近くより空の氣色おごろくしく、海  
上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いごど波  
風夥しくなりて、數多の船ゆき方知らずなりにけるに、皇子の御船  
のみは障なく伊勢の海に着かせ給ひぬ。顯信朝臣はもごより御船  
にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸の國なる内の海  
に來着きたる船ありき。方々に漂ひしなかに、この二つの船同じ風  
にて東西に吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべ  
き。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかがと覺えし  
に、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし  
まして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いごど思ひ合はせ  
られて、尊くもありしかな。又常陸は元より心ざす方なれば、御志あ  
る輩相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州野州の守も、次の春重ねて

下向して、各國に就きにき。

(一)「ぬるがうち  
に見るをのみ  
を夢さいは  
ん、はかなき  
世をもうつし  
とは見ず」  
(古今集、壬生  
忠孝)  
(二)藤原經忠、正  
平七年(二〇  
五十一)薨、年

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、隠  
れましましぬとぞ聞えし。寐るがうちなる夢の世、今に始めぬ習と  
は知りながら、かず／＼目の前なる心地して、老の涙もかきあへね  
ば、筆の迹さへささこほりぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、  
前の夜より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳  
へ申されぬ。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。

(三)應神天皇。

昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましまし  
き。されど神功皇后ほごなく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、  
胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十  
餘年中、絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を  
定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年あま  
りがほご宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空

しくありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受け  
ましましぬれば、この御光に争ひ奉るものやはあるべきなかく  
かくて靜まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。

——神皇正統記——

### 五 光 堂

泉 鏡 花

(一)岩手縣磐井郡  
平泉村。

釋尊

厨

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。  
大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何もな  
い、それが莊嚴であつた。陽の光が幽に漏れた。

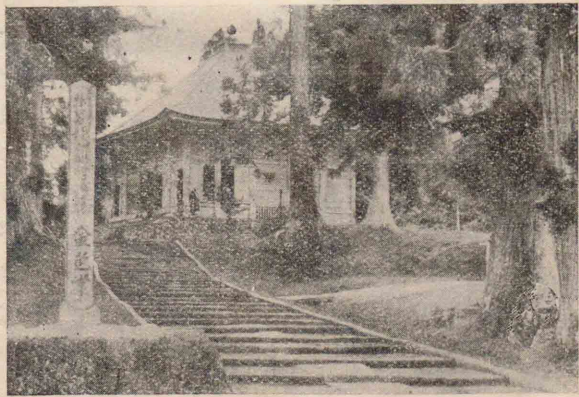
裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡覽券を  
出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂次に寶  
物庫、さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏、辨財天の順序である。

皆參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐ又あこを鎖するのであ  
る。寶物庫には番人がゐて、經藏には年の若い出家が、火の氣もなし

に一人經机に對つてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且芝生に散つて、敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、たしか淺葱櫻といふ札が建つてゐた。けれどもそのみには限らない。所々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに隨つて、はつと訝を見せて咲い



堂 色 金

たのはなかつた。薄墨、鬱金また淺葱といったやうな、どの櫻も皆ぼつこりとして曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつた爲かも知れない。

と、階の前の花片が、折からの冷たい風にはら／＼と誘はれて、さつこ散つて、この光堂の中を空さまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に玉を刻んで、緑青にさびたのが、なほ嚴に美しい。その翼をばら／＼とたゝいて、ちら／＼と床にこぼれかゝる。——と、宙で黄金の卷柱の光をうけて、はつと金色に輝くのを見た時は、思はず驚嘆の瞳を見はつた。

床も、承塵も、柱は固より、たゞずむ所、踏む所は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆は思はれないで、しかも些かのけげんばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われ等仙骨を持たない身も、この雲は且踏んでも破れぬ。その雲を

空さま

羽目

仙骨

七寶莊嚴  
種々相

すかして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹を、そのまゝ柱にしてゑがかれた十二光佛の微妙な種々相は、一つく錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏とした珠玉の中にあらはれて、清く明らかに、しかも幽な幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてゐる。

この柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置せられ、壇の中には眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつてゐるさうである。

雖芥子の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

(一)鎮守府將  
軍藤原清衡、  
その子基衡、  
孫秀衡。



中尊寺金色堂内部

迦陵頻迦  
かなづ

錫杖

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、  
風に軽く吹かれながらきら／＼と輝くのを、不思議な塵よと見れ  
ば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懐かしい。

羽目には天女——迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ  
浮出てゐる。影をうけた束貫つかみきの材は、鈴かねと草の花の玉との螺鈿であ  
る。漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておは  
します。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた、青い毛の部  
厚な横顔が見られるが、づづつと足を舉げさうな構である。右にこ  
の轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優  
鬘王、左に一匣を捧げたのが善哉童子、この両側左右の背後に、淨名  
居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを

紺紙金泥

清麗巧緻

(一)中尊寺の西南四町。清衡供進の金銀泥の一切經を藏めてある。

肩にかつぐやうに杖ついて立つ。髯も、額も、目も、眉も、そのいづれもにこゝとして、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのである。獅子が。

この須彌壇を左に、一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥、銀泥で、本經の圖解をゑがく。清麗巧緻、且神秘である。

今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げるが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に色の青白い、瘦せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一禮に答へて、

「御緩り御覽なさい。」

二三の散佚サツシツはあらうが、いふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行

散佚

まぜ書の一切經、並びに判官最良の第一人者三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板ソウパンの一切經が、皆黒耀コウヤウの珠玉の如く、漆の架に満ちてゐる。一切經の全部量は、七駄片馬カクマと稱へるのである。

「——拜見をいたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すすと經堂を出て、朴齒ハシの高足駄で、卷袖で、寒くほつそりと草を行く。

清らかな僧であつた。

——七寶の柱——

### 六 頼朝と義經

九郎御曹司浮島(一)が原に着き給ひ、兵衛佐殿(二)の陣の前、三町ばかり引退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「ここに白旗白じるしにて、清げなる武者五六十騎ばかり見え

(一)源義經。駿河國駿東郡愛鷹山の隈なる須戸沼附近の原野。  
(二)右兵衛權佐。源頼朝。

(一)名は忠信、色代

たるは、誰なるらんおぼつかなし。假名、實名を尋ねてまゐれ。さて、堀彌太郎を御使にて遣はさる。家子、郎等數多引具して參る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、「ここに白じるしにておはしまし候は、誰人にて渡らせ給ひて候ぞ。假名、實名をたしかに承り候へ。鎌倉殿の仰にて候。」とまうしければ、その中に二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に、鍬形打ちて猪頸に着、大中黒の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿も知るしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日につぎて馳參じて候。見參にいらてたび候へ。」と仰せられければ、堀彌太郎さては御兄弟にてましましけり。と馬よりこんでおり、御曹司の乳母子佐藤三郎を呼出して、色代あり、彌太郎一町ばか

(一)父左馬頭源義朝、  
(二)平清盛の繼母、  
(三)蛭ヶ小島。



源義經(前賢故實)

り馬をひかせけり。かくて佐殿の御前に參り、この由申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、この度は殊の外うれしげにて、「さらばこれへおはしまし候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくこれに御覽じて、まづ涙に咽せび給へば、御曹司もともに聲を呑みて泣き給ふ。  
互に心ゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、「さても頭(一)の殿(一)に後れ奉りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。賴朝池(二)の尼の宥められしによりて、伊豆(三)の配所にて伊東、北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向の由は微に承りて候ひしかども、



音信だにも申さず候。兄弟ありとは御忘れ候はで、取敢へず御上り候。こゝ申し盡し難く、悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々をはじめとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手上せばや、思へども、身は一人なり。頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官を上せんと思へば、心安き兄弟もなし。他人を上せんと思へば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊わしを待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖(一)八幡殿の後三年の合戦に、舍弟刑部丞(二)と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、頼朝がたゞ今の心にかかまざるべき。けふより後は魚と水との如くにして、先祖の耻をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はこかくの返事もなくして、袂をぞし

(一)源義家

(二)源義光

魚と水との如く

こかくの返事もなく

ぼられける。これを見て大名、小名、互の御心推量りて、皆袖をぞ濡しける。

しばらくありて御曹司申されけるは、仰の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん、配所へ御下りの後は、義經も山科(一)に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六まで形かたちの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取敢へず馳参る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候心地してこそ候へ。身をば君に進すすらする上は、いかがが仰に従ひ参らせまゐせでは候べき。と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

(一)山城國宇治郡の北部、京都と大津の間、形の如く

序文  
跋文

(一)東京帝國大學  
教授文學博士  
上田萬年  
(二)東京高等師範  
學校教授文學  
博士松井簡治  
心祝

### 七 大日本國語辭典の序

十年一昔といふことを思ふと、上田<sup>(一)</sup>、松井<sup>(二)</sup>の二君が國語辭書の編纂に着手せられてからも、一昔はごくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれて打興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃始めて小學校に入つた余が娘は、すでに人に嫁いで、人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今やその第一巻が愈、出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに窮がない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や、軍事や、工業や、貿易やの進歩發展の跡

年の流

工程

(Card)  
ここへは採集  
語用紙

(一)東京市小石川  
區關口駒井町

を見て、その間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業はかういふ中に徐々こそその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬幾十萬といふ古語や新語は、幾百部幾千部の典籍圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理せられる。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事ははてしなく續く。傍から見れば抄<sup>カ</sup>の行かぬことは齒痒いやうで、いつ方のつくところか危まれるほどであつた。編輯室は松井君の邸内<sup>(一)</sup>の離家にあるが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度かわからぬ。二君の筆と頭腦は間斷なくこの間に活動して、取るものは取り、捨てるものは捨て、その進歩<sup>カ</sup>は遅いが、その成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山

を成す喩のやうに、編纂の稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻もなく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目ざましく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たびその室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人もその難事業たることを承認せずには居られぬ。又編纂者の決心と根氣を尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業ではなくして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎そんしき、随つて國民教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることは言ふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普

拮据

閑事業

緊急

及が根本である。狭い編纂室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命こゝろがあり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに増加したのを祝する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。又精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に取りての立派な強みになる。この一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらの喜悅を感じる所以である。この十年は國語界に於ても、亦無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業はいつも世間と没交渉のものではない。専心な研究

没交渉

紛糾

は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものであ  
る。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て行  
くわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絶え  
ず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易な事ではな  
い。靜寂な編輯局は、紛糾した實社會と常に相往來して居るのであ  
る。

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな  
國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。思  
ふに後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完  
成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の満足と喜悅を察知すると同時に、今か今か三十餘年  
を待暮した同友とともに、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮か  
べようと思ふのである。

一大白

雪は政一、醒  
雪はその號、醒  
國文學者、都文  
學博士、大正六  
年の人、大正六  
年歿、年四十六

ことばの話 「自修文」

佐々 醒 雪

不思議なものはことばの變遷である。日本語は幸にして二千年近い記録を存  
してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも萬世一系の皇室を戴いた  
同一民族の間のみ發達したので、今から約千年前に出來たといはれる竹取物  
語や伊勢物語を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐ  
る。こんな國はいふまでもなく、世界中に又こはないのである。一千年前即ち  
十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久  
しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多い。  
例へば、甚だしく變遷したものは「いへ」といふ語であらう。昔は「いへ」  
といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一  
家族中の主長で、即ち戸主のことであつた。然るに今日「家」といふと、家屋  
即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。  
更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が

世紀  
一世紀は百年  
間をいふ

主長  
かしら。

薄倖者 ふしあはせな人  
雲泥の違 天地の差、非常な差のこと

「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧乏人や薄倖者はくちやを「あはれなる人」といふのは、雲泥の違ではないか。「かなし」といふ語も、今日では悲哀の義にのみ使ふが、古は極めて寵愛してゐる妻や子供のことを、「かなしき妹」とか「かなしくする兒」とかいつた。



佐々木醒雪

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様な變化は認められる。

例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑かみくづ買かひが「御不用物は御座いませんか」と呼

んで來る。然るに中古では、「不用なる者」といふと、用ひるに堪へぬごんまかあはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者又は無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものは御座いませんか」と呼歩いたら、

「いたづら者はないかね。」と呼歩く鼠取藥と間違へられたであらう。

これ等はまた單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて、藥を煎せんじることがなくなつても、藥罐やくくわんといふ名は残つてゐたり、その他、不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中希代きだいなのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬころ、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶まっちゃの席ばかりに用ひたから、これを茶碗ちawanといつたのである。然るに日本で硬かたい上等のものが澤山出來るやうになると、御飯を食へるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗いけちawanとか、茶飲茶碗ちやくちawanとかいふ不思議な語が出來た。今日では珈琲茶碗かひちawanとさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのや珈琲を飲むのは、飯碗、珈琲碗かひちawanとでもいひさうなものだが、さう理窟りくつ通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽さかづき」「酒盃さかづき」の「さか」である。「な」は何でも副食物ふくじよくにするものことで、古は

語源

ことばのもと

矛盾 つじつまのあはぬこと

列擧 かぞへあげる

抹茶

製茶を茶臼ちうすでひいて粉にしたもの

副食物 おかず

下戸  
酒のきらひな  
者

野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆磯菜いそなといつた。それから魚類は「な」のなかの上等なものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等な草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒さけといふものは、上戸じやうこ即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤ぜいたくな副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名いみやうを得るやうになつた。すでに魚類が「さかな」といふことに定まつてしまふと、下戸げこが食べても、やはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗ちawanといふのと同じ不思議である。

たつさはる  
關係する。從  
事する。  
叩き大工  
下級の大工。

言葉は又使つてゐる中に、段々下落するものである。例へば、「大工」といふ語は工即ち工藝家中の俊秀しゆんしゆなものの尊稱そんけいで、多くの小工せうこうどもの統領とんりやうを呼ぶ名であつた。然るに今日では、建築事業にたづさはるものは、小屋掛こやがけの叩き大工でも、やはり大工である。かの棟梁どうりやう、親方おやぢなども同様で、今日は、一人の手下てしやもない、子分こぶんのない男でも、印絆いんぱん纏まとへ着てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。

轉訛  
かはりなまる  
こと。  
江戸歌舞伎  
江戸におこつ  
た歌舞伎の芝  
居。  
人爲的  
人の力でこと  
さらに作るこ  
と。  
變造語  
つくりかへた  
ことば。

齋宮  
いつきのみや  
ともよむ。皇  
女で大神宮に  
お仕へになる  
方。

最後に一つ故意に轉訛てんくわせしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎かぶきなどには、故意に作った人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、丸木橋まるきばしを獨木橋ひとりばしといつたり、一軒家を獨立家屋どくりつがやといつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。その他には迷信から來た變造語へんざうごも色々ある。例へば、海邊うみべに生えてゐる蘆あしといふ草を、「惡し」と聞えるといつて、わざと「よし」と呼びかへたり、四よを「死」と通とほるので「よ」といつたり、梨なしを「ありの實」、硯箱えんばこを「あたり箱」、鯛たうを「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も伊勢の大神宮に御奉仕ごほうじになる齋宮さいぐうの御所ごしよでは、髪のない僧侶そうりよを、わざと「髮長」などといつた例もある。

要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語が、例へば髮長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

——醒雪遺稿——

# 八 仁和寺の法師

## 一 石清水

吉田兼好

(一)京都市の西郊、花園村にある、宇多天皇の御宇に俗に御室といふ。

(二)山城國綴喜郡石清水の山上に、清水八幡宮の石清水八幡宮のことは、今も大宮の貞観元年の創建と云ふ。

(三)かちより詣つ水も石清水の麓にある末末社。

(四)かばかり

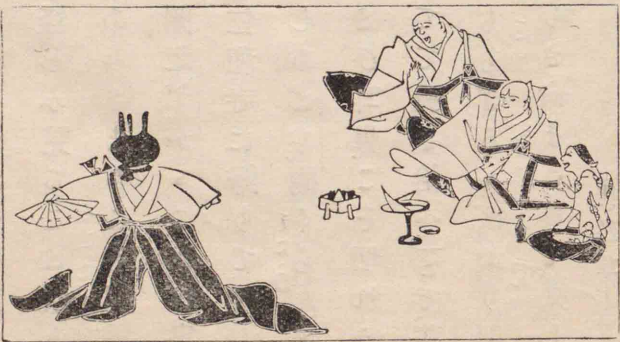


仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひたちて、ただ一人かちより詣でけり、極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さ八てかたへの人に逢ひて、年ごる思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごはしけれ。かたへに逢ひて、神へ参るこ

そ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

## 二 鼎

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、おのゝ遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でて後抜かんとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、いかかはせん惑ひけり。さかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、た



(筆 蕙 一 田 浮) 師 法 鼎

たゞ腫れに腫

かづく

おどろ

水もはれる

くどもる

やすく割れず響きて堪難かりければ、かなはかなせんはですべきやうなくて、三足なる角の上に帷子カケゴロを打掛けて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師イシのがりとら奉て行きけるに、道すがら人の怪しみ見るこゝ限りなし。醫師イシの許に差入りて、向かひるたりけんありさま、さそれここを異様イサマなりけめ。物をいふにも、くどもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず。傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など、枕上に寄りゐて泣悲しめども、聞きこくらんこも覺えず。かゝるほほごに、或者のいふやうは「たたここひ耳鼻こそ切れうすこも、命ばかりは、ななごか生きざらん。力をたてて引き給へ。」とて、藁のしべをまはりに差入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かきうげながら、抜けにけり。からき命あぶらまうあぶらけて、久しく病みゐたりけり。

——徒然草——

### 九 芍薬の花

大名のもごに客あり。ふるまひに湯漬出でたり。その席へ又客あり。それにも膳を据ゑたり。又客來あり。膳を出せとあれども、つひに出しかぬる時、物まかなふ者を呼出し、「何なにここて手間もいらぬ事ことの遅きや。湯を得わかさぬか。」としかからるゝ時、手を束くわねて、「湯はござるが、づけが御座ない。」と申したるに、ぞぞつつと笑になりける。

家主飯を食ふところへ、常に寄合ふ人來りぬ。なになに、飯ははや過ぎたるか。と問ふに、「いまだし。」あらお樂みや。とてかまはず。又人來る時、飯は食はれぬか。と問ふは、や過ぎたり。といふ。あらお氣やすさや。一人は寒山、一人は拾得しとくと各名をいうて出る狂言あり。然るに二人連立ちたる先の者、これは寒山拾得と申す者にて候。と名のりしかば、次の者言はんここなかりしに、「我等もその連にて候。」神妙にもなき人集りゐける中に、一人いふ、そちたちの中に、雷の

(一)支那唐の隱者、  
(二)唐の奇僧

神妙にもなき人



鮓ササを食うた人があるか。『いやなし。』さうあらう。稀なものぢやほごに。『してそちは食うたか。』なか／＼食うた。『味は甘いか、酸いか。』と問ふに、『ちと雲臭かつた。』

この花ハナ物モノ

〔一〕難波津に咲くやこの花冬春べと咲くやこの花（讀人不知）

何とて芍薬をば歌に詠みたるなきぞと、不審する者あれば、それこそ詠みたる歌あれ。

難波津（一）に芍薬の花冬ごもり

今をはるべと芍薬のはな。

無興

けしからず物ごとに祝ふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日の晚いひ教へけるは、『今宵は常より疾く宿に歸り休み、あすは早く起きて來り門を叩け。内より』たぞや。『といふ時、『福の神にて候。』』と答へよ。即ち戸を明けて呼入れん。『と懇に言ひふくめて後、亭主は心にかげ、鶏の鳴くと同じやうに起きて、門に待ちあけり。案の如く戸を叩く。』たぞ／＼。』と問ふ。『いや與三郎。』と答ふる無興さ。しぶ／＼に門をあ

仰天す

けてより、そこもと火を點し、若水を汲み、爛をすうれども、亭主顔のさま悪しくて、更に物いはず。中間不思議に思ひ、つく／＼思案し見れど、宵に教へられし福の神をうち忘れ、やう／＼酒を飲む頃に思ひ出して仰天し、膳をあげ、座敷を立ちざまに、『さらば福の神で御座ある。お暇申し参らす。』といひたり。

——醒睡笑——

一〇 歸り行く労働者 百田宗治

一人の大きな人間が私の前を歩いて行く。  
私はその後からついて行く。

それはなんと立派な人間だらう。  
くしや／＼になつた頭髮。  
日にやけて赤茶けた強さうな皮膚。

廣い肩幅。

汗みごろになつて破れた着物。

だがその腕はごうだ。

着物がらあらはれた腕は。

その凸起した力瘤コブはごうだ。

その幅廣い手のひらは。

丈夫さうなあの足を見よ、

一步々々

大地この強い落着いた接觸はごうだ。

黙して歩いて行く一人の巨人、

ごこまで彼は歩み續けて行くのだらう。

お、彼は河岸の荷揚場から來たのだ。

汗あせと力ちからの一日の労働を終へて、

今ここから家へ歸るのだ。

遠い場末の家路に向かふのだ。

妻と子供の待つてゐるその家へ歸るのだ。

入日は彼に一杯に照り、

影は長く地に曳いてゐる。

あ、萬物この夕陽ゆふひに照り輝く中に、

巨人だけ獨り自己の姿を運ぶのだ。

彼だけ獨り眞に輝くのだ。

その光を受けるのだ。

地上樂しく生きるのだ。

—日本近代名詩集—

一一 土の匂

春めく  
香み

長塚節

はやて  
空際  
穴の多々

春は空からも土からも微に動く。毎日のやうに、西から埃を巻いて来るはやてが、ごうかするごはたと止つて、空際にはふはくして、綿のやうに白い雲が、ほつかりと暖い日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かずにゐることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を念ふ一ほいに吸うて、その勢づいた土の微な刺戟を根に感じさせるご、田圃の榛の木のおみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひら／＼と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くゝくゝと鳴きだすごがある。空から射す日の光は、そろ／＼と熱度を増して、土はそれをいくらでも吸うて止まない。土はすべてを段々刺戟して、堀のほごりには蘆や、芝や、その他の草が空ご

相映じて、すつきりごその首を擡げる。軟さに満たされた空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひら／＼と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らしてゐる。蛙は假死の状態から離れて、軟な草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したごを空に向かつて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、たゞ空にのみ響いて、快げである。

彼等は更に、春の到つたごを一切の生物に向かつて促す。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ない中は、鳴くごを止めまいご力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽な朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらつてゐる。周囲の林を見る。岬のやうな形にはつてゐる水田を抱へて、周囲の

綠 (十五畫)

本性

硬直

空間

林は漸くその本性のまにハシクガフネ、勝手に白つほいのや、赤つほいのや、黄色つほいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林のそこらこらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆蚕豆の花も可憐可愛な黒い瞳を聚めて、羞はしさうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雑木林の間には、又芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒ヒギの下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、「春がふけた」と呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中ののみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌く日の光の中に没して、その小さな喉のちぎれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は

愈、益、鳴きはこつて、櫛の木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に附いてゐたすべての雑草が爪立して、たゞ空へへへと暖な光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きこめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行すること、を好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘銘に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕しはじめ。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼ウツかしながら、殊更に鳴きたてる。白い絨絲ワタのやうな雨は、水が田に満ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて來た蛙は、刈株を引返しへへ働いてゐる人々の周圍から足下から逼つて、敏捷にその手を動かさせ動かせと促して止

聲を吞む

まぬ。蛙がびつたりと聲を吞む時には、日中の暖さに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと静かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲にゆられつゝ、夜間に生長する。櫟や、樺や、その他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節まではいくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲やその他のあさましい損害が或は

あるにしても、しとくと屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い緑が地上を掩うて、爽な涼しい蔭を作るのである。

—土—

### 二二 五月雨の詩趣

徳田 秋江

雨は通例厭なものになつてゐるが、反對に又詩趣に富み、風情の多いものもなつてゐる。殊に春雨は艶なものに數へられ、その他夕立といひ、白雨といひ、時雨といひ、むら雨といひ、冬雨、秋霖各風情があるが、就中五月雨は雨百態の中でも深刻な味はひがある。

詩人、藝術家はその眼に映るいかなるものをも化して、よく彼等の詩題たらしめる。殊に我が國在來の文學の中でも、俳句は最もよく物を詩化するの自由と多方面の趣味を持つてゐる。

私は五月雨の厭はしさを思ひ、さうして梅雨の期間を過さうか

白雨  
秋霖

畫家

詩化す

天地尚のすべしもの  
森羅萬象  
往く所として  
可ならざるな

と考へる度に、人力ではどうすることも出来ないこの厭ふべき自然現象の襲來に對し、たゞ消極的の諦の中に、一脉の畫趣と詩趣を思念し、森羅萬象を悉く詩化して、往く所として可ならざるはない俳人の自然觀に學ぶところが頗る多い。

五月雨には名句がなか／＼多い。芭蕉の句、

五月雨の降りのかしてや光堂

といへば、自然に對して、歴史に對して、悲しい諦の中にも、無限の詩趣がある。

さみだれを集めて早し最上川

の句を味はふと、豪宕たる長江大河が、五月雨の濁水に水嵩を増して滔々と流れてゆく壯觀が眼に浮かぶ。それから不玉といふ人の句で、やはり七部集の中に、  
白鷺や青くもならずつゆの中

(一)日本三急流の  
妻山に發し、  
羽後との國境  
をなして酒田  
港に至つて海  
に注ぐ。長さ  
約六十二里。  
長江大河

といふのがある。毎日毎日降續く五月雨に、池の水際の蘆の葉は青く伸びて濃く茂り、その色は融けて流れようとしてゐる。側に立つて餌を漁つてゐる白鷺も、爲に青く染りさうであるが、さて染らないのが不思議である。

野坡の句に、

さみだれに小鮒を握る子供かな

といふ鄙びた句がある。この句を思ふと、自分の聯想は自然にわが幼時に還つて來る。田舎では麥が黃熟する頃で、續いて田植が始り、五月雨が幾日も降續き、不斷は水の絶え／＼な川にも水嵩がまさり、田圃の小溝にも水が／＼溢れる。さういふ時に、ごうかするこ、大きな鮒が戸まごひをして、水田の縁の畦道の水溜に遊び上り、水の退いたあとに取殘されて、びちや／＼跳ねてゐる。それを見付けて握り取つた時のうれしさは、忘れられぬ思出である。

(一)志田氏。蕉門  
十哲の一。元  
文五年(一四  
七〇年)歿。年  
七十八。

戸まごひ

極致  
きはまりいた  
るところ

知らぬけに  
知らない風に

(一)源義家は後三年の役に凱旋する途中磐城勿來關に落花を見つて吹く風をなこその關と思へども道もせにちる山櫻かな詠じた

(二)平忠度は一ノ谷の戦に討死した折、旅中の詠草に旅宿花一行暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならましとの詠を残した

(三)梶原景季は一ノ谷の戦に咲亂れた梅の枝を簾に挿して戦つた  
大童  
髪をふりみだした風  
心憎い  
おしくかしい

花を育てる心〔自修文〕

大隈重信

美を愛する心の極致は、眞を愛し善を愛する心の極致に合する。世界大戦に當つて、聯合諸國は正義人道の爲、全人類の永遠の平和と幸福の爲、國家、民族の運命を賭して敵と戦つたのである。すでに崇高な眞善の理想を追うて戦ふものの心が、いかにして崇高な美の方面に働かぬことがあらう。戦争も死も人生の一事實である。何でその前に恐怖するわけがあらう。さればこそ日本の武士はあすは覺悟の戦場といふ間際にも、親戚、朋友集つて訣別の宴を開き、暢氣に歌ひもすれば舞ひもする。茶會を催すこか連歌を試みるこかいふ事をして、死の運命の背後より脅すこことも知らぬげにふるまふ。特に彼等には花を愛する者が多く、道もせに散る山櫻に暫し征馬の手綱を弛めた者もあれば、行暮れて木の下蔭を宿として、花の心を思ひやつた者もあり、梅花の一枝を簾に挿み、大童になつて戦つた心憎い勇士もあり、今でも美譚として人口に膾炙してゐる。人はいかなる場合にも美を味はふ餘裕のあるもの。かやうなところから死を美化した戦争文學なども生まれて、人心に深い感動を與へるのである。

元來花を嫌だといふ人はないはずだ。まづ人が死ねば花を贈る。佛前には花を捧げる。婚姻があれば花を飾る。大宴會があれば花を卓上に装置する。つひには儀式一遍でやつて居るにしても、根本は花を愛する人情にある。

「花より團子」といふが、いかに無風流漢でも、花は片附けて、その費用だけ

御馳走に換へてくれといふ者

もあるまい。花を愛する心は

審美的意識と連つて居るもの

で、その優美な情操はやがて

人間生活の高貴を示し、人を



大隈重信

神に近づかしめる。それだから我が輩は常にいつて居る、花を愛するくらゐな人に決して悪人はない。試にいかなる野草の花でもこれを手に取つて見給へ。大宇宙の眞善美の微妙な姿は、一朵の花の色彩と結構の上に遺憾なく表れて居るでないか。我が輩はいつでも外國婦人の訪問を受ける時には、必ずブーケを作り、美しい紐を飾つて贈るのを例として居るが、これがこにかく我が輩の

美、みづもろし  
審美的意識  
美醜を識別す  
る心

Bouquet  
(花束)

花を育てる心(自修文)

花好きの性質から出て居るので、我が輩の悪人ならぬ何よりの證據である。

まづこんな理窟をつけて色々な花を作る。蘭などは特に面白いもので、これにも我流の理窟を色々考へて賞美して居るが、理窟の方は割合に發達せぬけれども、蘭そのものの發達は著しく、種類が多くて、原種は五六千、それに人工を加へたものを合はせると、ざつと一萬前後にも上らう。その世界に亘る地理的分布を見ると、いふにいはれぬ妙味を覺えるのである。まづフィリピン、ジャワ、ボルネオ、スマトラ、ニューギニアなどの南洋に一番多く、全種類の約十分の六はこれ等の國々にある。更に南米のブラジルや、ペルー、即ちアマゾン流域からアンデス山脉を越えて、西方太平洋岸に出た地方にも少からず産する。特にアマゾン河畔には優れた良種があるが、危険で容易に採れぬ。かうして見ると不思議な事には、この高潔な花中の君子たる蘭の花の香ふ所は、皆我が日本人の盛に活動して居る所で、日本民族の將來發展し行く領域が、この名花に象徴せられて居るかとも想はれる。蘭は香氣の高い花で、蜂を招き寄せる。蜂は香をたぐつて蜜を取りに来る。人間が蘭の所在を尋ね廻つて、その地方に

- (1) Philippine.
- (2) Java.
- (3) Borneo.
- (4) Sumatra.
- (5) New Guinea.
- (6) Brazil.
- (7) Peru.
- (8) Amazon.
- (9) Andes.

象徴  
形であらはす。

發展するものやはり自然であらう。まあいつて見れば、人間も蜂も同じく美的活動をするもの。花を愛するのは、言換へればまた文明的活動である。面白いではないか。

かやうに花が好きで色々作り試みて居るので、我が輩は人並以上に花の知識、特にその培養上の知識を持つて居る。色を變へる、香のないものに香を添へる、そして丹精して色々な變種を作り出すのだが、早くて二三年、おそいのは七八年もかゝる。かういふ優長な事をこの老爺がやつて居る。太く短い流儀はいかぬ。我が輩はせかず、あせらず、徐々に行くのである。「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず」家康はうまいことをいつて居る。我が輩はこの家康流に行くのである。

——早稻田清話——

### 二三 箱王仇に遇ふ

かくて箱王は、御奉幣の時までも人一人も連れず、介錯の僧一人

(一)河津五郎の曾孫は、殺され、信曾に再嫁した。當の僧は、子の僧となつて、介錯した。

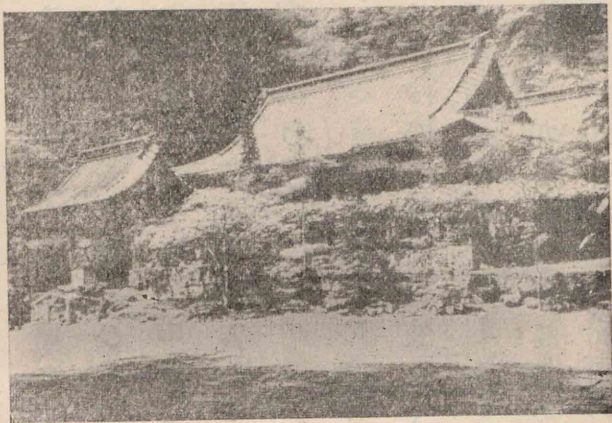


(一) 工藤祐經。叔父伊東祐親に怨を含み、その子河津祐泰を殺した。  
 (二) 源頼朝。  
 (三) 畠山重忠。武藏秩父の豪族。  
 (四) 和田義盛。相模國三浦の豪族。  
 (五) 里見義成。

(六) 祐泰は伊豆の河津を領してゐたのでこれを姓とした。

相具し、御座所の後に隠れゐて、御供の人々を「彼はたぞ。此はいかに。」と委しく問ひければ、この僧鎌倉の案内者にて、大名小名の名よく知りたれば、教へけり。されどいまだ祐經をば明さず。あはれ問はばやさは思へども、怪しく思はれじとて、のこりの人を問ひまはす。君の左の一の座はたぞ。「彼こそ秩父の重忠よ。」右の一の座はいかに。「これぞ三浦の義盛なる。」さてその次はたぞ。「里見の源太といふものよ。」さてその次は「豊島の冠者といふ人なり。」たゞ今物仰せらるゝは誰やらん。「これこそは當時聞ゆる梶原平三景時とて、さぶらひごものは鬼神に思ふものよ。」又めての方方に少し引きのきて、半装束の珠數持ちて香の直垂着たるは、いかなる人にてあるやらん。「かれこそ御分たちの一門、伊東のぬし工藤左衛門祐經よ。御分の父河津殿とは從弟なり。御前さらぬきりもの。」とぞ教へける。

さてはそれにてありけるよ。この事思ひ寄らでいふやらん。知りぬれども何事かあらんと思ひこなしにいふやらんといつしか胸うち騒ぎけれど、思ひ寄らざるさまにて、「このものはよきをのこにてありけるや。三十二三にぞなるらん。みづからが父にや似たる。」と問ふ。少しも似給はず。まさしき兄弟さへ似たるは少し。まして從弟に似たるものはなし。年こそ河津殿の討たれ給ひしほごなれ。その人のましまさば、四十あまりにてあるべし。これより遙かに丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、後より見ればうつぶき、脇より見れば四角なる大の男に、てましまししが、馬の上、かちだち並ぶ人なし。殊にし、の上手にて、



箱根神社

ば胸そり、後より見ればうつぶき、脇より見れば四角なる大の男に、てましまししが、馬の上、かちだち並ぶ人なし。殊にし、の上手にて、

(一)大庭景親。  
(二)天城山の麓。  
狩場

力の強きこと四五箇國にはならびなき大力なり。されば相模の國の住人大庭の三郎が弟股野の五郎景久とて、相撲に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちてすまふに、三番勝ちてこそ、いとご名を揚げ給ひしが、それを最後にて、歸りざまにあへなく討たれ給ひき。大力と申せども、死の途には力及ばず。とぞ語りける。箱王は父が昔をつくづくと聽きて、今更なる心地して、しのびの涙に咽せびけり。

やゝありて、我このあひだ祈りし願のかなふにこそあるべけれ。うかゞひよりて、便宜よくば一刀刺し、いかにもならんと思ひ定めて、御坊はこれにまします。法師こそ寄らね、わらんべは近く寄りても苦しからず、山寺に住めばとて、人を見知らぬはむげなり。近くよりて見知らん。とて、赤地の錦にて柄鞘卷きたる守刀を脇に、隠し、大衆の中をぬけ出でて、祐經がうしろ近くぞ狙ひ寄りける。祐經

傳馬、尊禰  
むけ

冥加  
神佛、加護  
オママ  
まほる

もしばしの冥加やありけん、梶原三郎兵衛を隔てて、箱王を見つけて、これなるわらんべの、まなござし、河津の三郎に似たるものかな。誠やこの御山には、伊東が孫のありと聞けば、若しこれにてやあるらん、目を放さずまぼりければ、さうなく寄りざりけり。祐經なほよく見れば、まなこの見返し、顔だましひ、少しも違ふところなし。祐經は念誦はてて後、大衆の中へ立入つて、「伊東入道の孫この御山に候と聞く。いづくの坊に候ぞや。名をば何と申すぞ。」と問ひければ、或僧申すやう、御名をば箱王殿と申して、別當の坊にましました候。「この頃は里に候か。これに候か。」と問ひければ、これにこそ。とて、東西を見めぐらし、長絹の直垂に、松に藤を縫うて、萌黄の絲にて菊綴して、こなた向に立ち給ふこそ。と教へけり。さればこそ、思ひもこの座に歸り、箱王を招きければ、願ふところと喜びて、祐經が膝近く寄添ひけり。左の手にて箱王が肩を抑へ、右の手にて髪を

われは

狩マシヤク

搔撫でて「あつはれ父に似給ふものかな。今まで見奉らざることの  
 本意なさよ。わ殿わんぜんは河津殿の子息と聞くは眞か。兄は男になり給ふ  
 か。曾我の太郎はいたふほしくすまかあたり奉るか。知らざるものの馴々し  
 くかやうに申す接尾語とばし思ひ給ふな。御分の父河津殿は従兄弟な  
 りおん身殿おんみばらにも親しきものにては祐経ばかりなり。見奉れば昔の思  
 ひ出でられて、今更あはれに存ずるぞ。急ぎ法師になり、別當べつどうにつ  
 き給へ。弟子多しといふホとも、祐経ほどの方人持まちたる人まあらじ。便宜  
 をもつて上さまへもよきやうに申し、寺門の訴訟あらば申し達す  
 べし。今より後はいかなる大事なりとも、心をおかず仰せられよ。か  
 なへて奉るべし。わ殿の兄にもかやうに申すたよりと傳へ給へ。父にも添  
 はで、いかに便たよりなくたよりますらん。行むか騰は乘馬まなどの用の時は承るべ  
 し。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。まこ  
 とや古き語に、貴きは賤しきが嫉ねたみ、智者をば愚人が憎む。罪障は千

率爾 不意

載に消えず、報は干劫かんせつに絶えずと申し傳へたり。さても見參の初に、  
 折節せつ引出物ひきだすものこそなけれ。又空しからんも無念なり。これを「とて、懷なよ  
 り赤木の柄えいに胴金入つたる刀一腰取出し、箱王にこそ取らせけれ。  
 何なにもなく受取れども、箱王は涙に咽せびけり。便宜よくば一刀刺さ  
 んと思へども、目を放さず、その上大の男の、常に肩に手を置きけれ  
 ば、なまじひなる事をしないだして、こがひな取られ、人に笑はれじと  
 思ひ止りぬ。た言ふ事まにては「さん候さんこう」とばかりなり。率爾すつじの見參こ  
 そ所存ところぞんの外ほかなれ。さりながら喜び入り存候。里下りの序には、わ殿の  
 兄十郎殿と打連れて來り候へ。返すく。こいひて立ちにけり。箱王  
 力及ばず止りぬ。

—曾我物語—

(一)鎌倉將軍家、源賴朝

一四 陣屋問答 その一

森 鷗 外

(一)將軍家の星形垂簾すいれんの下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂新開荒

壬午八月  
辰の刻  
奸盜山賊

二郎忠氏ゐる。

第一の 名 もはや辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はごういたいたやら(第二の大名にも)ごより曾我の殿はらはは奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止かたはらにも繩附になり申した。

第二の 大名

情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したさて、討つた工藤は父の仇ゆる、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推参おしよせいたいたご申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

雑色ざしき

たゞ今これへ曾我の五郎を召連れてまゐります。

(雑色退場五郎登場、大見小平太實政繩を取る、狩野座を進む)

狩野 曾我の五郎承れ。たゞ今、これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意まじりを尋ねるためぢや。さあ逐一いちいちに申し立てい。

五郎怒る。 黙れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和の

宿意  
逐一

落魄  
おちぶれよ

ぢきに

たてつく所存たてつくところぞろ

ため、自滅に及んでこのかた、久しく落魄おちぶれいたいて居るが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿たけちのりが流を酌む由緒よしある身分ぢや。申すほどの事はぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野

怪あやしかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開 それをかれこれ申すのは、犯人の身となつても、まだ君にたてつく所存か。

頼朝の聲こゑ、簾すだれの内より

いや待て、狩野、新開。曾我の五郎が申す條、尤もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

(簾を半ば捲く、頼朝登場、舎人二人、近臣二人、隨ふ、狩野退く、新開中央に残る)

五郎新開に、そこを退いてもらはう。これより物申すに、わ殿わががそ

れにゐては、わ殿に物言ふに似て快うない。

將軍 新開退いて遣はせ。

新開 はあ。

舎人(直衛)

(新聞退く)

將軍 見れば昨夜の雨にそこの土は濕つて居る。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒 はあ。

(卒右手より敷革を持出で敷く)

五郎(感激す)

この敷革を見るにつけ、

十年の昔ぞしのぼる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見を賜はり、伊東の莊を拜領し、なほそれにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと讒舌を揮うたため、

- (一) 京都六波羅平家の政所
- (二) 平清盛、同重盛、宗盛
- (三) 工藤祐經
- (四) 頼朝の宿將宇佐美平次實政
- (五) 伊豆國田方郡

兄一萬は十三歳、

この箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引据ゑられし敷革は、

夢見ごこちに春を待つ

荅を擢く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨を霽し、この世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわがために、

この一枚の敷革は、

父に見えん彼の岸に

渡す弘誓の舟筏。

有難く拜領いたす。(敷く)

- (一) 鎌倉の南、稲村崎より滑川に至る間

大慈心

弘誓の舟筏

將軍 殊勝殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、このたび工藤を討取つたのは、年頃の企か、但しは俄の思立か。

五郎 それは申すまでもないこと。我等が父を討たれたは十七年の昔、兄は五歳、某は三歳。しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてからこのかたは、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにもその往返往返には心を附け、足柄、箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりにたゞずみ、兄弟つけ狙うたが、身分ある彼が同勢多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

磨下の侍  
仔細ない  
磨下の侍

將軍 ふん、さもあらう。さて工藤は父の仇ゆる仔細ないが、多くの磨下の侍をば、何故妄りに傷つけた。

狼藉  
白刃ヲ附ケタ

五郎 もごより我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、及向ふものあらん限り、千萬騎をも切磨けうと存じたが、我等が名告る聲を聞いて、足の立ち所も知らず逃行くゆる、後日のために一太刀づつ、印を附けたまででござる。

所領安堵

將軍 して大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆる、切棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝の爲に引返したは、せめてもの心掛、今はなかく不便に存ずる。

神妙

將軍 神妙な詞ぢや。ぢやが、それほど義理を辨へたそちが、すでに敵を討つた上、なぜ予が座所に踏みこんだ。

東道の主人

五郎 これは憚ある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが成

行は申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。又敵工藤は格別の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば、一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍 おう、よう隠さずに申したぞ。このたびの企を前以て存じて居つた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事のついでにそれも申せ。

五郎 さやうなもの一人もござらぬ。

將軍 さはいへ、母にはうち明けたであらうな。

五郎 こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死に行けと申す親のござらうか。

將軍 おう、一族否運フシワラに陥つたそちが申條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎は居らぬか。

仁田の鬢上手背後にて はあ。四郎忠常たゞ今それへ。

否運

(仁田首桶を持ち、登場)

### 一五 陣屋問答 その二

仁田 仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参オウラいたいてござる。

將軍 五郎、兄にあはせて遣はずぞ。いましめ解け。

(大見、五郎の繩を解く)

仁田 實驗の上申し請ひ、わ殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。

(首桶を開く)

五郎 懐かしや兄上。

點イカし列ねし松の火の、

消えなばさにもと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても兄上、

不覺

どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも時致だに居合はせたら。

仁田 いや、わ殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢こむすぶに、薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、及はほつきと鐔元つばもとから、折れた、

五郎 なに、兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上には佩かせなんだか。

仁田 おう、その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎 さてはよしよかりある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

(五郎歎く、犬房丸鞭を持ち走り出づ)

犬房 父上の敵思ひ知れ。(五郎を鞭うつ)

五郎 や、この小童こわらは何者ぢや。

(五郎睨む、犬房たじろぐ)

仁田 犬房丸御前ぢやぞ。

五郎 なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、幼くて

親を討たれし悲みは、

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向かひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣に、さあその笞しもてで打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思つたに、優しい事を言



うて下さる。それではごうも打たれませぬ。

五郎 おう、さうか。さあ、につくい小童。打たれるなら打つて見い。

犬房 なんの打たいで。おのれがく。(連打す)

將軍 もうよいく。犬房それで堪忍いたせ。

犬房 はつ。(鞭を棄てて平伏す)

征夷大將軍

將軍 五郎、この上問ふべき事もないが、頼朝こんざう閫外こんがいの職を辱カクシうして、勇士猛卒を惜しむこと、何物にも譬へられぬ。ごうぢや、志を翻して奉公いたしてくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬこと。若し處刑を宥められて、行住自由心に任せるなら、某は犬房に、この素首すかぶを取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き恵に換へられぬ

遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一緒に死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。(大見にさあ、繩を打たれい。)

大見 いや、某は五郎丸が掛けたまゝの御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほごいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍 待て。勇士を失ふは遺恨ながら、その志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎(居直る) こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領いたさう。

將軍(起つ) わが打つ繩は不動の縹索難伏のそちにはふさはしからう。いでく。(階を降らんとす。幕)

—高瀬舟—

志奪ふべからず

一六 清水

春すぎて夏きたるらし白たへの

ころもほしたり天の香具山

あたりまは衣を月しるふ

持統天皇

(一) 第四十一代。天武天皇の皇。大實二年(三六二年)崩御。御年五十八。

ふくからに  
あきのしを  
きはむへや  
まかせを  
らしてふら  
む

蹟筆之貫紀傳

(二) 歌人、古今集の撰者。天慶九年(一六〇二年)歿。

なつの夜はふすかこすれば杜鵑啼く一聲にあくるしのゝめ

紀貫之

(三) 武將、又歌人。治承四年(一一三四年)平家滅さうとて敗死した、年七十七。

庭の面はまだかわかぬに夕立の

源頼政

そらさりげなくすめる月かな

賀茂真淵

大びえや小びえの雲のめぐりきて  
ゆふだちすなり粟津野の原

夏  
渡り原を来り朝日空  
新影支六月迎空真淵

蹟筆淵真賀

(一) 歌人。新古今集の撰者。嘉祿三年(一一八七年)歿。年八十。

かぜそよぐならの小川の夕暮は  
みそぎぞ夏のしるしなりける

藤原家隆

(二) 歌僧。俗稱佐藤義清。建久元年(一一八五年)歿。年七十三。

道のべの清水ながるゝ柳かげ  
しばしこてこそ立ちこまりつれ

西行法師

一七 果物の味はひ 正岡子規

(一)河東碧梧桐と高濱虚子  
(二)神戸市の北部

果物ほご味はひの高く清きものはあらじ。小兒はこれを好み、仙人もこれを食ふこかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味はひ言難し。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。莓は西洋莓を良しとす。されど行脚の足くたびれて、草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰うち据ゑて、汗を拭ふ手の下に端なく見附けて取食ひたる、味はひは問はず、時に取りていこうれし。神戸に病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲みえぬに、わが爲に、とて、碧虚二子の朝な(一)、諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉をもたらしくれたる、いかばかりうれしかりしぞ。

枇杷はうまけれど、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘き物はなし。晝餉さへしたゝめずに食りたる木曾の旅の、思ひ出でられて懐かし。夏蜜柑、ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しこにはあらねど、少し病みて飯さへ、えたうべぬ時など、またなき物とぞ覺ゆる。

(一)西王母が漢の帝に仙桃をすすめたこと

梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら、一片を口にしたる、氷にも優りてすがくしうこそ、林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、すゞやかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。桃には種類多し。良きもあり、悪しきもあり。王母(一)後園の風味は知らねど、すべて桃は世に詔はぬところ、一段高き趣あり。

甜瓜、西瓜ひなびたれど、誠あり、捨難し。葡萄は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりさて世に負かず。君子の風あり。栗は賤し。甘藷と比べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷やかなる腸(一)を持ちながら、味はひはいと濃(二)やかなり。多血性の人、世を厭ひて里に隠れながら、な



(畫忠井淺) 規子岡正

ほ物に觸れて熱血を迸らすにもたごへんか。柚子は氣高けれど食  
 ふべからず。石榴無花果のわれか  
 ら裂けたるは食劣りぞする。  
 われこの夏頃よりわけて果物  
 を貪り、物書かんごすれば必ずこ  
 れを食ふ。書きさして倦めば又こ  
 れを食ふ。食へば則ち心涼しく、氣

勇む。氣勇めば則ち想涌き、筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。

日ごとく十顆の梨を食ひけり。

朱硯に葡萄のからの散亂す。

柿くうて洪水の詩を草しけり。

—子規隨筆續篇—

東京新報 四月廿二日 二十七

### 一八 家

石川啄木

そこはか

けさもふと目のさめし時、  
 わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、  
 顔洗ふ間もそのことを、そこはかとどめもなととなく思ひしが、  
 つこめ先より一日の仕事をへて歸り來て、  
 夕餉の後の茶を啜り煙草をのめば、  
 むらさきの煙の味はひのなつかしさ。  
 はかなくもまたそのことのひよつこ心に浮かび來る——  
 はかなくも、またかなしくも。

場所は鐵道に遠からぬ  
 心おきなき故郷の村はづれに選びてん。  
 西洋風の木造のさつはりとしたひと構。  
 高からずとも、さてはまた何の飾のなくとも、

〔Balcony〕佛語  
英語バルコニ  
ー、張出縁

廣き階段(一)バルコンと明るき書齋……  
げにさなりすわり心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと。

思ひしごとに少しづつかへし間取のさまなごを

心のうちにゑがきつゝ、

ランプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば、

その家に住む樂しさのまざまじりく見ゆる心地して、

泣く兒に添乳ソグする妻のひと間の隅のあちら向き、

そを幸さ口もこにはかなきゑみものぼり來る。

さてその庭は廣くして草の繁るにまかせてん。たつた

夏もなれば夏の雨おのがじしなる草の葉に

音立てて降る快さ。

またその隅にひともど大樹を植ゑて、

白塗の木の腰掛を根に置かん。――

雨降らぬ日はそこに出て、

新あたらしき明日の來るを信まことぢといふ  
自分の言葉に  
嘘うそはなけれ

蹟筆木啄川石

〔一〕東京市日本橋  
區にある書籍  
店

新あたらしき明日  
の來るを信  
ぢといふ自  
分の言葉に  
嘘うそはなけれ  
ぎ

かの煙濃くかをりよきエジプト煙草ふかしつゝ、

四五日おきに送り來る丸善(一)よりの新刊の

本のページを切りかけて、

食事の知らせあるまでをうつらくと過すべく、

またことごとにつぶらなる眼を見開きて聞きほるきこ

村の子供を集めては、色々な話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、

いつこしもなく若き日にわかれ来て、

月々のくらしのここに疲れゆく、

都市居住者のいそがしき心に一度浮かびては、

はかなくも、またかなしくも、

懐かしくていつまでも棄つるに惜しきこの思、

そのかずかずの満たされぬ望ごともに、

はじめより空しきここご知りながら、

妻にも告げず眞白なるランプの笠を見つめつゝ、

ひそりひそかに、熱心に心のうちに思ひつゞくる。

— 啄木全集 —

(一)西曆一九一六年  
九月  
Vive la  
Français.

心膽を寒から  
しむ  
乾坤一轉

乾坤一轉  
天地

(二)Versailles.  
パリの西南十  
一哩ヴェルサイ  
イユにある宮  
殿。

堵列す

光彩陸離

一九 平和は成れり

近衛文麿

(一) 六月二十八日、朝來暖煙軽く揚りて、曉風爽なり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組ごなき行列「ビィブラ・フランセ」を唱へて、旗を振りつゝ、市中を練歩き、自動車の如きも、亦思ひノゝに装を凝らしたり。憶へば過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に心膽を寒からしめし事、幾度ぞ、今や乾坤一轉して、靄然たる瑞氣の搖曳するを見る。パリ人の今日の喜や、實に想像するに餘りありといふべし。

(二) この日ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は箒目正しく掃清められて、一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。両側に堵列せる共和衛兵の銀色の兜と、白き鹿革の袴下と、黒く光れる長靴は、光彩陸離として莊

巴里市  
衛兵



ンソルイウ

重なるこの日の儀式をいやが上にも莊重ならしめたり。午後三時各國全權委員は皆すでに入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等も亦所狭きまでに詰めこみて、さしにも廣き鏡の間も、些かの餘地だになかりしが、今は近世の歴史に最も光輝ある儀式を前に控ふることを、さすがに咳一つ聞えず、滿場靜まり返れり。



ジージ・ドイロ

見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央には、クレマンソー氏例の如く椅子に深く腰をおろし、向かつて左にはウィルソン大統領を始として米國委員、次にイタリー委員、次にベルギー委員あり、又ク氏の向かつて右にはロイド・ジョージ氏を始として、英

George  
Rughe  
Clemensau,  
(西曆一八四  
一年生)  
Woodrow  
Wilson,  
(西曆一八五  
六年—一九二  
四年)  
David Lloyd  
George,  
(西曆一八六  
三年生)

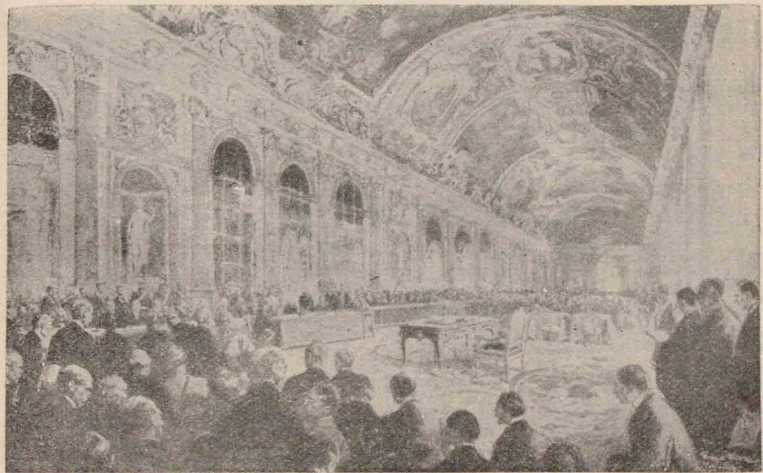
居流る



望公寺園西

本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本の委員西園寺公爵を始め、順次に居流れたり。いづれも黒のフロックコート姿にて、華麗眼をそばだてしむるものにては、一つも見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、その背後には、特に今日に限り庭園まで入るを許されし幾千の人々堵の如く並び、て、調印の終るを今や遅しと待構へたり。

午後三時を過ぐるころ五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時にその方に注がる、や、やがて二名のドイツ委員は幾多の佛國將校に見守られつゝ、入場し來れり。いづれもフロックコートを着し、稍俯向き勝に極めて物靜かなる態を粧ひつゝ、日本委員の隣なる定め席に着けり。席定まるや、クレマ



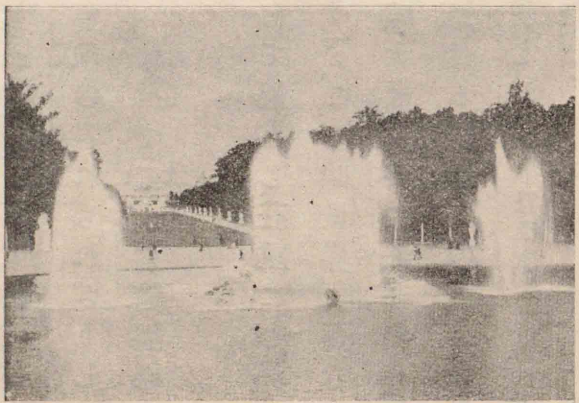
平 和 條 約 調 印 の 光 景

ンソー氏は徐に立ちて、まづドイツ委員より調印すべき旨を告ぐ。ここに於てドイツ委員等は、はやをら起上り、案内せらるゝまゝに、クレマンソー氏の直前、條約の正文を置かれたる卓子の前まで歩を運べり。

彼等は平靜にして、殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代るゝ條約の正文に署名したり。その間僅かに二三分時のみ。嗚呼、幾百萬の人命と幾千億の財貨とを

(1) Wilhelm,  
(西曆一八八六年)  
(2) Bismarck,  
(西曆一八八五年)  
(3) Moltke,  
(西曆一八八〇年)

犠牲として漸く贏得たる最後の結果はかくの如きか。ドイツの運命はかくして定まり了んぬ。見よ、自席に歸り行く二人の黒き姿の淋しくもあはれなるを。これを彼の五十年の昔、同じこの大廣間に於て、ウイリヤム老帝がビスマルク、モルトケを始め雲の如き賢臣名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざるものあらん。



ヴエサルユイ宮大噴水

ドイツ委員の座に復するや、ウイリヤム氏まづ座を立ち、續いて四名の米國委員これに従ひ、同じ卓子に至りて署名せり。次にはロイド・ジョージ氏を先登として英本國



Uruguay.  
南米の一共和

委員次に英植民地委員次に佛國委員次にイタリー委員次に日本委員の順序にて、各一團づつ代る／＼その卓子に於て署名し、かくて最後のウルグアイ委員に至るまで、時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由としてこれに加らざりし支那を除き、すべて二十六箇國調印の全く終りしは午後三時四十九分なり。

ここに於てクレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも簡單に宣言していはく「平和は今や成れり」と。この時世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は宮殿の内外に蟬集せる幾十萬の人々の歡呼の聲と相應じて、新なる世界の出現を祝しぬ。——戰後歐米見聞録——

後藤象次郎伯とクレマンソー氏〔自修文〕

尾崎行雄

(一)政治家、三重縣の人、櫻堂と號する。慶應義塾出身。豪放、意氣が盛つた事、こせつかないこと。潤達、度量が廣く、大まかなこと。(二)政治家、舊高知藩士、伯爵を授けられた。明治三十年薨、年六十。舉止、動作、舉動。(三)伊藤博文。(四)大隈重信。(五)東京市芝區。酒數行の後、酒もりが大分盛になつた時、潮合、ころあひ。大權返上、徳川幕府が政治上の權を朝廷に返上した。次郎は藩主象次郎は藩に勤め、内容に勤めた。白して慶喜に奉還せしめられたのである。

豪放潤達、一見人をして快感を起さしめる點では、予が知人中後藤伯の右に出るものはなかつた。その言論舉止、何となく雄大な所があつて、誠に愉快な人であつた。伯の最も他人に異なる所は、過去を語らなかつた一事であらう。未來に多大な希望をもつ人は、概して過去を語るこゝが少いが、一概にさうばかりにも行かないものと見え、伊藤公の如きは、未來に多大な希望を持つてゐたにも拘らず、なほ喜んで過去を語つた。大隈侯と後藤伯とは、ごちらも容易に過去を語らなかつた。特に後藤伯に至つては、語ることを嫌つたやうだ。或夜高輪の後藤邸で二三の親友とともに會食した時、今夜こそは過去を語らせて見ようと思へ、酒數行の後、よい潮合を計つて、予は「大權返上」の話を持出して見た。二百五十年間自由勝手に日本全國を支配し來つた徳川氏をして、一朝その政權を朝廷に返上せしむべしといふのは、當時にあつては、實に驚天動地の大議論だ。堂々これを主張し、忽ちその實行を見るに至つたのだから、後藤伯一生の歴史中最も光輝あるページに違ない。いかに過去を語るこゝの嫌

後藤象次郎伯とクレマンソー氏〔自修文〕

な伯と雖も、必ず釣りこまれるだらうと思ひの外、伯は予等の質問に對して、

通り一遍の答をしたかと思ふと、いつか話題を他に轉じてしまつた。語つてもよささうなものだが、語らなかつた。不思議な人である。



後藤象次郎

一九一〇年予はフランスに遊び、わが大使館の宴會に於て始めてクレマンソー氏に邂逅した

時、その相貌骨格が餘りよく後藤伯に似てゐるのに驚いた。佛國上流社會には、外國語を話す人は少いが、ク氏はその除外例で、英語が非常に達者であつたか



クレマンソー

ら、予は主に氏と雜談を交へた。然るにその話方といひ、話材の選方といひ、後藤伯に酷似してゐるのに再び驚かされた。その相貌骨格の類似する人は、その性情までも類似するものに見える。

レピントン中佐の「戦後日記」を讀むと、レ氏がクレマンソー氏と會見して、

邂逅す  
ふと出會ふこと。めぐりあふ。  
除外例  
普通に於てはまらない特別な例。

百端  
いろ／＼。  
捕捉す  
とらへる。  
褒貶  
ほめたり、わる口いたりすること。

「戦中及び戦後に於ける閣下の勲業に關しては、浮説百端、人をしてその真相を捕捉する能はざらしめる。閣下が世上の毀譽褒貶に無頓着なことは、我等の熟知するところであるが、天下後世の爲に、この大事件の真相を明らかにせられるやう希望する。」旨を述べたのに對して、ク氏は「いや、世上の誤傳に對しては、予は何事もいふまい、又何事も正すまい。」といつて、一切過去を語ることを避け、「且世上の浮説流言を蔑視するのを一種の娛樂とするやうに感じられた由の記事があつた。」この所亦後藤伯の言行に酷似してゐる。

クレマンソー氏が先年兇徒に狙撃せられた時の彈丸は、今なほ胸骨の右邊に留つてゐるが、「戦後日記」の記者が訪問した朝は、たま／＼醫師の來診日であつたから、談話は自らその事に及んで、ク氏の令妹が「彈丸があそこに當つて、生命に別條がなかつたのは、實に天の下せる奇蹟であります。」といふと、クレマンソー氏は、「天が奇蹟を示す氣なら、寧ろ兇漢を制止した方がよかつたのに。」といひながら哄笑したと書いてあるが、何だか後藤伯の音容が目に見え、耳に聞えるやうに感ずる。

哄笑  
大笑・高笑。

逸話事  
かゝれた話

Sgt. Peter.

クリスト自身の  
重んずる事

一籌を輸す  
一步をゆづる

風半  
すがた。

全世界の俊豪を一堂に集めて開かれた戦後の平和會議に、クレマンソー氏は議長役目を勤めたが、午餐後の休憩時間(イギリスの俗名)（歐米人中にはこの時間に十五分乃至三十分間午睡の習慣を有するものが多い）について色々な説が出た時に、氏は、「その問題はごうでもよい。議長は諸君の名論を聞きながら、坐睡（イギリスの俗名）をする権利を持つてゐるから。」といった。これも後藤伯のいひさうな言葉だ。

後藤伯に關する逸話は頗る多いが、クレマンソー氏に關する逸話は一層多い。甚だしいのになると、まだ生きてゐる氏に死後の逸話すらある。それはクレマンソー氏が死後天國に赴いた時、聖徒ペテロがク氏を見て、「生前に犯した残らずの罪惡を白狀せよ。」と命じたのに對し、ク氏は「仰までもなく白狀したい考で、四邊を隈なく探したが、天國には僧侶らしいものは一人も見えない。」と答へたといふのだ。僧侶はみな地獄に墮ち、天國には一人も來得ないこの意である。さすがの後藤伯もこの點だけはク氏に「一籌を輸するやうだ。」

後藤伯の言語風采は、東洋豪傑の標本であつたが、佛人にしてクレマンソー氏ほど、東洋豪傑の風采（イギリスの俗名）を備へた人はなからう。

——愕堂漫筆——

(一)當時の山口縣知事林市藏に與へた手紙。  
(二)陸軍大將男爵田中義一。

110 帝國青年のために 山縣 有朋

謹啓。時下益々御清適慶賀この事に存候。さて先般(一)田中參謀次長、貴管下地方へ旅行相成候由にて、過日面會の節、種々近狀並びに貴下御盡瘁の模様をも承り及候。殊に青年團に關しても一方ならず御配慮の趣、老生に於ても蔭ながら喜び居候次第にて、なほこの上にも一層の御盡力を希望致候。申すまでもこれなく、今次の歐洲大戦争終了の後は、全世界に亘り精神上、物質上非常なる變化を來し、我が帝國に於ても、直接間接にその影響を被るべきは明白の事にこれあり、右に就いても、將來帝國を擔ひて立つべき青年には、確乎たる決心と覺悟とを要すべく、今日より豫めこれを指導鍛鍊する要あること、今更多言を要すまじく候。

世界大戦の原因は種々これあるべく候へども、要するに、國民民族の競争の結果に外ならず、而してこの競争が、今次の大戦に依り

東亞

東トシテチマイナ  
ラニフロ

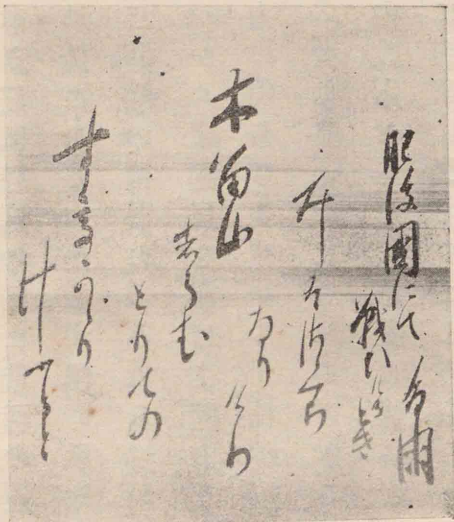
必至の情勢  
心ズンナリ有

中歐の天地に於て解決を告ぐると否とに拘らず、次に起るべき競争は、必ず東亞の地を中心と致すべきは、避くべからざる必至の情勢と存ぜられ候。なほこれを想像するに、その競争は政治上、經濟上種々なる形式を以て顯れ、勢の赴くところ、國難を醸成するまでに立到るものと、覺悟せざるべからざる儀と存候。幸に今次の大戦に當りては、帝國は遠く交戦の地域を離れ、直接の害毒を被ること少しと雖も、戦後の競争に關しては直接に波瀾タイキョウを被り、この間若し一步を誤らば、邦家千載の悔と相成るべく、實に容易ならざる時期と相考へられ候。九一ナニ、

近世帝國が列強と交渉を有するに至りたる以來、五六十年間の事を追懷するに、非常なる難局に遭遇せし事一再ならず、今日よりこれを思ふだに、なほ心膽の寒きを覺ゆる事もこれあり、この間に處し、幸に難局を披き、國運の伸張を見たるは、殆ど天佑とも申すべ

く、上に千古の聖帝を仰ぎ、下忠誠の國民あり、幾多の賢宰、良將、籌謀宜しきを得、相俟つてここに至りたるは、勿論ながら、又當時帝國は

肥後國にて  
戦ひけると  
き  
有 朋  
木留山しら  
むとりての  
すてかどり  
けふると見  
しは櫻なり  
けり



山縣有朋筆蹟

列強の間に伍し、その地位必ずしも今日の如く重要ならざりしにも因るべく候。然るに今日に至りては、帝國は事實上諸列強と伍を同じくするに至りたるのみならず、今後列強が東亞の天地に覇を争ふに當りては、帝國は彼等に取りては重大なる競争者にして、又當路の大障害なれば、事に當りて困難を感ずる度も、昔日に比し幾層倍するは明らかなるべく候。高木風に當るの喩の如く、帝國の地位は戦後に起るべき大颶風の衝オウカウに當る高樓と

も申すべく、基礎棟梁は勿論、戸障子の末に至るまで、寸分の弛みなきに非ずば、よくこの大風を凌ぎて全きを保つこと能はざるべく、これを想へば、日夜<sup>じふに</sup>憂<sup>うれ</sup>に堪へざる次第にこれあり候。この來るべき狂風怒濤の日に、帝國の運命を託するものは、實に帝國青年の外他にあるべからず候。御承知の如く、今日に於て國運の進展は、一二宰相の指導にのみ依るべからず。又單に陸海の兵力にのみ頼るべからず。國民を舉げて國力を盡し、いはゆる上下一統舉國一致の力に倚らざるべからず。精神上はた物質上、各種の方面に青年努力の要は益、重大にこれあり候。この意義に於て、<sup>おれは</sup>老生は各地に青年團の設置せられて修養に従ふを喜ぶことも、又益、改善進歩して、眞に國家に資するところあらんことを希ふ次第にこれあり候。

牧民の官

貴下恰もこの時勢に際し、<sup>おれは</sup>牧民の官として、指導誘掖の事に當られ、熱心從事せらるゝを聞き、欣喜の情に堪へず、偏に成果を擧げら

れんことを切望致候。これ實に老生が帝國の前途の爲己み難き宿願にこれあり候。老生齡すでに八十歳を超え、今後帝國の爲に盡す餘命幾何もなし。たゞ將來ある青年に帝國の前途を依頼するの外これなく、老生の眞意御推察下され度候。草々

— 帝國青年 —

## 二 海洋の旅

永井 荷風

八月中旬、横濱から上海行の汽船に乗つて、神戸、門司を経て長崎<sup>(一)</sup>に上陸し、更に山を越えて茂木<sup>(二)</sup>の港に出で、入海を横切つて島原半島に遊んだ後、歸路は同じく上海より歸航の便船を待つて、同じ海と<sup>(三)</sup>同じ港を過ぎて、横濱に上陸した。二週日の間、自分は海ばかりを見た。島と岬と岩と船と雲ばかりを見た。いまだに強い海洋の空氣と色彩が、腸まで浸渡つてゐるやうな心持がする。

(一)長崎より南二里半  
(二)入海のやうになつてゐる千石灘  
(三)長崎縣南高來郡

自分はごういふ理由から、夏の旅行の目的地に、殊更暑いといはれた南方の長崎を選んだのか、自分ながらも少しくその解釋に苦しむのである。自分はたゞ廣々とした大きな景色が見たかつた。自分出来るだけ遠く自分の住んでゐる世界から離れた心持になりたかつた。この目的の爲には、汽車で内地の山間を行くよりも、船を以て海洋に泛ぶに如くはない。海は實に大きく自由である。夏の大空に輝く強い日光、奇怪な雲の峰、洋々たる波浪、壯快な帆影、すべて自由にして廣大なこれ等の海洋的風景は、いかに自分の心を快活にしてくれたであらう。

自分は海に沈むすさまじい夕陽の色に酔つた。岬の岩角を噛むおそろしい波の牙を見た。緑色をした島の上に立つ眞白な燈臺を見た。山の裾に休息してゐるあはれな漁村の屋根を見た。暗夜に舷（一）を打つ不知火の光を見た。水夫が叩く悲しい夜半の鐘を聞いた。異

船、西也、

（一）毎年陰曆七月晦日前後、九州三角、有明海、附近の海上に無数の火はれる。

なつた人種の旅客を見た。自分の祖國に對するそれ等の人々の批評をも聞いた。港に入つては活氣ある波止場の生活を見た。新しいさまざまの物音を聞いた。いろ／＼な船、いろ／＼な國の旗を見た。そして自分の見たり聞いたりしたそれ等の物は、悉く自分の心に向かつて、この世の生存のいかに愉快であるかを歌つて聞かせ、るもののやうに思はれた。夜半人の寐靜まつた時、たゞ一人舷に倚つて水を凝視すれば、「死」がいつも自分の前に廣がつてゐることを自覺するにつけ、自分は美しい星の下なるこの人生に對して、殆ど泣きたいほど切なく鋭い愛着の念に迫られたのである。

波浪を蹴つて進んで行く汽船の機關の一呼吸する響ごごに、自分の心はその身ごごにも遠い未知の境に運ばれて行く。きのふも海、けふも亦海。そして四日目の朝に、自分は繪のやうに美しく細長い入江の奥なる長崎に着いたのである。

(一)長崎の寺の多  
いのは、幕府  
時代の切支丹  
を撲滅する政  
策の結果であ  
る。

(二)キリスト教を  
呼んだが、本  
國では、カ  
ルトガルの  
波来したの  
であつた。

長崎は京都と同じやうに、極めて綺麗な物靜かな都であつた。石道、土塀、古寺、墓地、大木の多い街であつた。花の多い街であつた。樹木の葉の色は東京なごよりも一層鮮に濃いやうに見えた。東京の蟬は全く違つた。鳴聲の蟬が、夕立の降つて来るやうに市中到る所の樹木に鳴いてゐた。果物を賣歩く女の呼聲が、濕氣のない晴渡つた炎天の下に、長崎は日本からも遠く、支那からも遠く、切支丹の本國からも遠い、所であることを、しみじみと旅客の心に感じさせるやうに響く。この言難い遠國的な情調は、長崎の街々のはづれにある古寺の鐘の音によつて、一層深く味はひ得られるのであつた。

自分は未だ嘗て長崎に於けるやうな、軟な美しい鐘の音を聞いたことはない。上陸した最初の日の夕方、長崎の夕風が稱へて、烈しい炎暑の一日の後、入日とともに空氣は死んだやうに沈靜し、木

森閑

(一)長崎の山の手にある一街地

梵鐘

(二)長崎は一面を海に、三方は山に、圓形劇場のやうな形になつてゐる。



葉一枚動かない森閑とした黄昏、自分は海岸から掘割を傳はつて、

外国人向の商店ばかり並んだ一條の町を過ぎ、丸山に接する大徳寺といふ高臺の休茶屋から、暮れて行く港の景色を眺めてゐた時であつた。ここから、<sup>(一)</sup> 度も撞出される梵鐘の響は、長崎の町と入海を、ちやうど圓形劇場のやうに圓く圍む美しい丘陵に遮られて、夕風の沈靜した空氣の中に、いかにも長閑に軟く、そしていつまでも消えずに一つ所に漂つてゐる。最初に撞出された響が長く空中に漂つてゐる間に、新しく撞出される次の響が後か

俗縁  
うまのゆかり

ら後から追掛けて来て、互に相連れ合ふのである。連れ合ふ鐘の餘韻は、はやとつぷりと暮れはてた燈火の港を見下す自分の心に向かつて、早く俗縁を断つて、過去の繁華を夢に見つゝ、心地よく衰頽の平和に眠つて行くこの長崎に來いと、諭してくれるやうにも思はれた。

敢へて鐘の音のみではない、到る所散歩に適する市中の光景は、皆自分に向かつて、世界中でお前が身を隠すに適當な所は、支那でもなく、日本でもなく、西洋でもない。この特別な長崎ばかりだぞと、さゝやくやうに思はれた。幾箇所とも知れぬ長崎の古い寺々は、葛まつはるその土塀と、磨滅つた石段と、傾いた樓門の形に言知れぬ懐かしさを示すばかりで、奈良、京都の寺院の如くに過去の權威の壓迫を感じさせない。若しこの地に過去の背景があるとするれば、それは山の手なる天主堂の壁にかけてある油繪が示してゐるやう

(一)長崎市内大浦天主堂にある支那信徒の油繪

名狀し難い

な、悲壯な宗教迫害史の一節か、さらずば鎖國の爲に頓挫した日本民族雄飛のはかない名残のみである。痛嘆すべきこの二つの歴史は、畿内の山河がいつも自分に向かつて消極的教訓を語るに反して、長崎の風景に、一種名狀し難い憤恨と神秘の色調を帯びさせてゐるやうに思はれる。今では同じく京都のやうに悲しく廢れはててはゐるもの、なほ絶えず海と船によつて外國の空氣が通つてゐる爲か、京都ほど暗くはない。狭くはない。支那風に彩色した輕舟は、眞青な海の上と、灰色した掘割の石垣と石橋の下を絶えず動いてゐる。西洋人と支那人と内地人との子供は、青物市場のほとりに入亂れて遊んでゐる。いつも石の階段と敷石の坂道を上つて行く町々の家は皆古びて、どこもなく岩乗で、しかも小綺麗である。道路は極めて狭いけれども、靜かに心安く歩くことが出来る。車夫や物賣の相貌も非常に柔和であつた。

荷風全集

顔形



一二三 元 寇

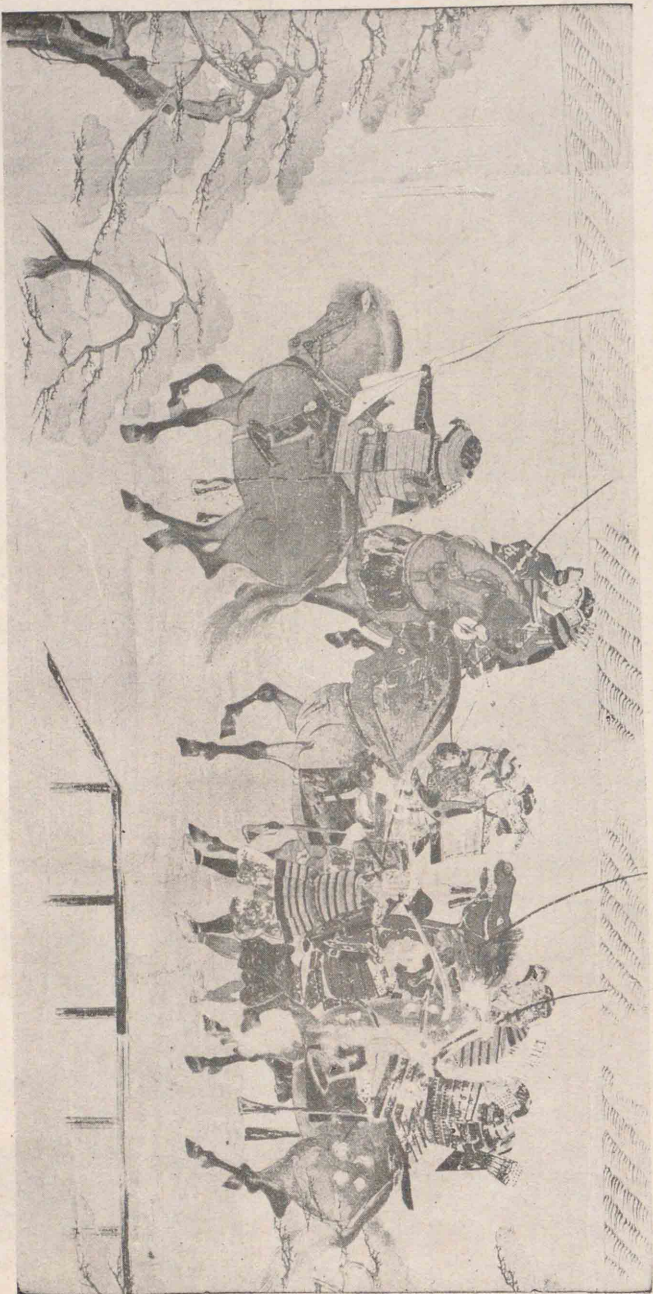
三 宅 雪 嶺

日露戦役の酣なりし時、朝廷は北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。

(一)北條第六代の執權時頼の子相模太郎安七(一三九四年)歿、三十四(の)の(み)と(よ)と

好を通ず  
戦端開かる

惟ふに元は國を滅すこと四十有餘、よくその呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たびこれと干戈を交ふるや、これを撃破して、また近海に出没すること能はざらしめぬ。元使者を遣はして好を通ずるを求め、時宗斷乎としてこれを拒めり。かくて戦端はここに開かれたり。これに就きて自ら三箇の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしに、あらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せしところにして、寧ろ國是の然らしめしこと



來 襲 古 蒙

(一)龜山天皇の御  
代弘安四年  
を去る十三年  
前

(二)後宇多天皇の  
御代

るご謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣はしたるは、實に文永五  
年にてありき。時宗年甫めて十八、余はその拒絶の獨斷ならざりし  
を信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四年<sup>(一)</sup>  
に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣正に旺盛、恐らくは斷乎  
たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鏖にした  
る、時宗興りて功ありとす。たゞ十三年間同一の方針なりしは、國論  
のこれを致ししものとすべし。

元の好を通ぜんことを求め、而して我のこれを拒絶せしは、稍穩  
ならざるに似たれども、彼の國書を閲するに、實に我に於て拒絶す  
るの已むべからざりしを知るべし。その書や文辭堂々、恩威並び具  
る。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲ししならんも、顧て我  
が國の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あら  
ず。その「闇を通じ好を結び、以て相親睦せん」といへる、辭として難ず

恩威並び具る

(一)今の朝鮮のこと

不遜

相懸隔す

理非明白

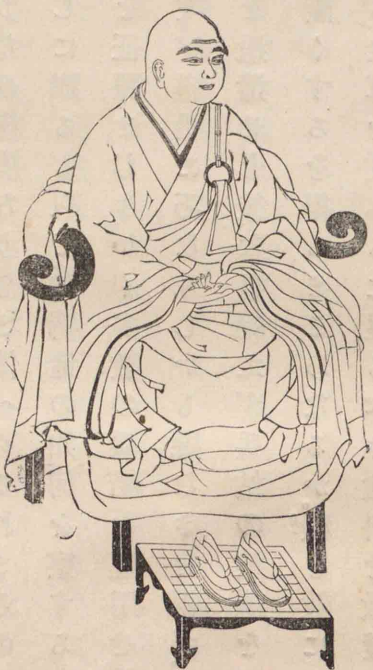
梟す

べきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗(一)と同一視する態あるは、その語に明らかなり、彼自ら何の異とするところあらざるべしと雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず、怒らざらんと欲するも豈得んや。當時彼の國書を覽し者、一として書辭の不遜なるを咎め且憤らざるはなかりしならん。國土面積の廣狹、相懸隔するの著しきを思ひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばしめんとして開戦に躊躇したらんも、理非はすでに明白なりしなり。元主、使者を派して我を促し、我これを斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りては已むを得ざりしところならん。則ち已むを得ざりしところならんと雖も、そのここに出でたるは、も我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若しよく我が國情に通ぜしならんには、決してここに出でざりしなるべし。彼すでに戦を開くに決し、十餘萬の大軍を

撃滅

危殆に瀕す

必勝の算



北條時宗

發して入寇す。一夜颶風俄に起り、兵船多く覆没す。我が兵これに乗じて襲撃し、殆どこれを殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん。言者の説にして當れりこそせば、即ちかの開戦に決せしは、策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、しかもその言ふところや實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戦に決せしは、必勝の算ありて然りしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵皆上陸したりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばか

りの軍隊を以てよく日本征服の功を擧げ得べきか。<sup>ゆえんをばあるうか？</sup>

Columbus.

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船は<sup>(一)</sup>コロンプスのアメリカ發見に用ひしものより、なほ堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壊せしに觀るも、以て略<sup>サト</sup>構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれなし。又彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。すでに十萬、二十萬の軍隊を送遣せし後、なほ絶えず兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得るところなるか。糧<sup>カ</sup>を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て、手を拱<sup>コウ</sup>きて彼の欲するがまゝに從ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべけれども、これ到底望みて得べからざるところならずや。

兵站  
糧を敵に因る  
手を拱く  
給養

<sup>(一)</sup>承久三年後鳥羽上皇が北條氏を滅さうとせられた時の戦亂

啻に軍隊給養の難きのみならず、彼我交戦の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内<sup>エノカ</sup>を指して西上せし者十九萬人、若しこれに關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに我は地理に精しく、便利を占むること亦多し。十萬、二十萬の元兵を擊擢<sup>ウツ</sup>するに於て何かあるべき。戦亂を見ざること五十餘年に亘りしと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ曾て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを経ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間たゞ戦争をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時この鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、

武を練る

鬱勃たる士氣

Mareo Polo.  
イタリーの旅行家、中央アジア、印度等を経て支那にに入り、元の世に二十餘年間留つた。

これを殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコ・ポーロの記するところに據れば、元兵の大敗せしは、その兩將の不和に基づける如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の不和なるに加ふ。單にこれのみを以てすとも、勝敗の數すでに明らかなりとすべし。

謬想 リニラ

いかなる點より察するも、我彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの虞なし。我の斷々として拒絶せる、決して無謀の舉にあらず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟する如きは、謬想に過ぎず。

目睹す

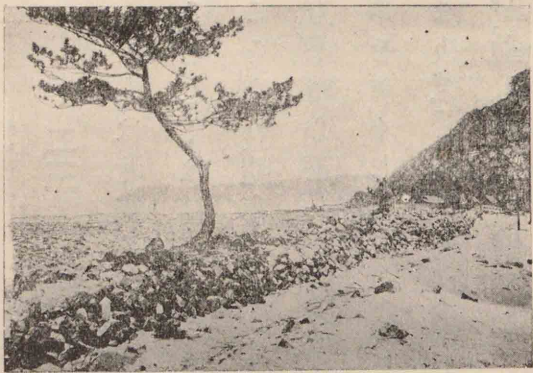
龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしはいとも畏し。すでに上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す、國內の民誰か奮つて國に殉ぜんごせざらん。これが爲に上下舉りて國難に當らんとご決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしごせんか、乃ち我が兵のいかに勇を鼓して邀撃せしかは知るべきなり。その海上に於けると同じく、これを陸上に鏖殺したるや必するに難からず。颶風の起りしは幸といふよりも、寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戦あらんも、遂に全勝を制し、更に勢に乗じて高

邀撃

醞釀す

較著

麗を略し、かくて漸く醞釀せる國內の紛争を移して、外地の經略を事ごしたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げ



しのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきものありしならん。颶風起りて元戦はずして勝ちしより、竟に武を海外に用ひず、徒に國內の紛争に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者ありて、事遂に止めり。智とすべきなり。この一役に於てだに海岸到る所造船の音喧しく、爲に費ししごころ莫大の額なりきご傳ふ。故を以て、若し一敗に懲りずして再舉を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾

底を傾く

くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを待  
たんや。  
——小泡十種——

一三三 「蒙古來」の詩

徳富蘇峰

吾人は北條氏の絶對的隨喜者にあらず。されどいかなる嚴正な  
る、若しくは精刻なる批評家も、北條氏の政治には、その程度に相違  
こそあれ、隨喜するを禁ずる能はざるべし。神皇正統記の著者が、大  
方泰時心正しく、政素直にして、人をはぐくみ、物に驕らず、公家の御  
事を重くし、本所の煩を止めしかば、風の前に塵なくして、天が下靜  
まりき。と謂ひしは、持平の見なるに似たり。乃ちその卓越なる史識  
が、動もすれば偏固なる繩墨に拘束せられたる白石さへも、時宗を  
散々に非難しつゝ、たゞ大元の兵頻りに我が國に寇せしを、己鎌倉  
に在りながらこれを破る。この一條その器度思ひ計るべし。この嘆

隨喜

(一)北畠親房

(二)北條泰時、北條義時の子

仁治三年(一一九〇年)歿、

年六十

持平の見

(三)新井白石

時宗、北條氏  
將軍

美の辭を漏らせり。頼襄の如き勤王主義の鼓吹者も、北條氏の不臣  
を嚴咎すると同時に、その護國の大功を感謝するに、殆ど言葉の制  
限を打忘れたるほどなりき。要するに、北條氏の撫民の内政と強硬  
なる外交とは、兩つながら後世の龜鑑たり。豈たゞ時宗のみと謂は  
んや。

北條氏政治の要旨は精力集中主義なりき。精力保存主義なりき。  
名よりも實とは彼等が一子相傳の秘訣なりき。彼等は虚名の甚だ  
無用なるを知れり。彼等からはから騷の甚だ有害なるを知れり。彼等は  
被治者の利益を圖るは、治者の勢力を鞏固ならしむる所以なるこ  
こを知れり。彼等は與ふるの取りたるは、政の實なりとの古訓をそ  
のまゝ應用したり。承久の亂は我が歴史に未曾有の大變なり。しか  
も勝利者たる北條氏は、その戦利品を一つも私するところあらざ  
りき。彼等は少くとも、治者の天職の一部分を解得し、且これを實行

和子之爲取者  
政之寶也。

したり。乃ち時宗の如きも、その一人たるのみ。蒙古來、吾不怖。吾怖關  
 東、令如山。直前斫賊不許顧。いかに北條氏の威信は徹底したるよ。  
 頼襄のこの句、時宗が鎌倉を一步をも出でずして元寇を掃蕩した  
 る消息を、囊括して遺憾なし。果然時宗も好男子なるかな。

Count Leo  
 Tolstoi.  
 露國の大文豪  
 (西曆一八二  
 〇年) 一九一  
 〇年)  
 Yasuaya  
 Polyana.

君子和而不同  
 小人同而不和

和して同ぜず

本文の記者明治二十九年九月露國を遊歴し、トルストイ翁をそ  
 のヤスナヤ・ポリアナの村莊に訪ふ。晚餐すでに撤して一家主客相  
 歡晤す。座中伯爵にして百姓の革帶を纏へる主人翁あり。風采都雅、  
 眉目清秀、純然たる貴公子の新主人公ト翁長子あり。これに相應す  
 る新夫人あり。これに對照する野裝蕭散なるト翁令嬢あり。非戰説  
 は勿論兵役に服するさへ罪惡の一に數へたる慈父の側に、長劍を  
 横たへ、軍服嚴めしき新士官ト翁の二男若しくは三男あり。いはゆ  
 る和して同ぜずとは、かゝる光景を稱するならん。何か座興をこ所  
 望せられたれども、記者はもとより極端なる無藝者なれば、應ずべ

絶倒す

き詮うらもなし。さりごとて強ひて否むも不本意と思ひ、思ひ附きたるま  
 ま、山陽の「蒙古來」を吟じたり。而して新夫人の如きは殆ど絶倒せん



庭家のイトスルト

ばかりなりさ。いはゆる箸の上げおろしに  
 もをかしき頃の年齢  
 なれば、その笑倒も理  
 なりき。しかもト翁は  
 頻りに手を揮つてこ  
 れを制し、靜聽を求め  
 たりき。讀者幸に如上

の閑話を本文に挿みたるを恕せよ。いかに餘儀なき場合とはいへ、  
 何故かゝる席上に於て「蒙古來」を吟じたるか。神ならぬ身の十年後  
 の戦役を豫知すべくもなし。たゞ年少より愛吟し、殆どその字句も

精神も我が心靈に化合したるを以て、覺えずここに到りしのみ。しかも今にしてこれを想へば、宛も一種の豫言たりし如きぞ不思議なる。

我が讀者の熟知せらるゝ如く、『蒙古來』の詩は山陽十八九歳の作にして、今時傳ふところは晩年聊か添足したるものなり。

筑海

颶氣連天黑。蔽海而來者何賊。蒙古來來自北。東西次第期。

吞食。嚇得趙家老寡婦。持此來擬男兒國。相模太郎膽如甕。防海。

將士人各力。蒙古來吾不怖。吾怖關東令如山。直前斫賊不許顧。

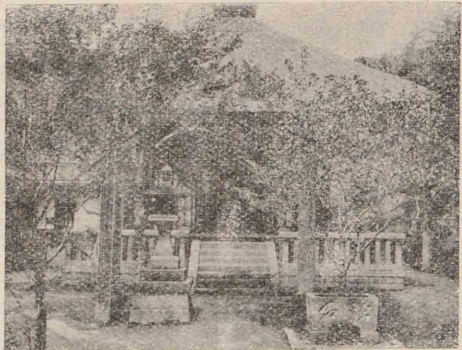
倒吾檣。登虜艦。擒虜將。吾軍喊。可恨東風一驅附。大濤不使羶血。

盡膏日本刀。

藝術としての批判は吾人の與り知るところにあらず。然れども若し、我が國に國民の猛志を謠ひたる詩ありとせば、これはその隨一たらざるべからず。我が帝國の二千六百年來、金甌無缺の獨立國

經國治國

- (一) 臨濟宗圓覺寺 派の本山 相模倉郡山内村に在る
- (二) 圓覺寺内に在る北條氏の祠堂
- (三) 東海道横須賀線、道驛岐點の鐵道



時宗祠堂 (鎌倉圓覺寺)

たる所以は、職として我が國民にこの元氣の存するに由る。而して徳川氏の極盛時に於て、上下交、泰平の柔軟空氣に沈醉し、昏昏として、たゞ佚樂をこれ事としたる時に於ても、かくの如き血湧き肉飛び、筋張り骨怒るの雄快文字を唱へ來る。誰か詩人は時勢を識らずといふか。誰か文章、國に益なしといふか。たゞこの一詩あり、賴襄以て不朽なるべし。國民としてその國を愛する、我が身を愛する如くならしめよ。經國の道多端なり。と雖も、その要旨はかくの如きのみ。

記者この頃鎌倉に遊び圓覺寺を訪ひ、いはゆる佛日庵の時宗祠堂に詣したり。大船横須賀線の鐵路は、亂暴にも山門の下を横斷したれども、一たび山門に入れば、山靜かにして太古の如し。翠杉森々



(一)圓覺寺佛殿の稱、後小松天皇の宸筆「大光明寶殿」の額が掲げてある。  
(二)宋の僧祖元(佛光禪師)。

として天を刺し、以て人間の塵埃を隔て、萬竿束ぬるが如き修篁は、自然の墻壁をなして、山門を護す。大光明寶殿前の老柏樹は、幾多の星霜を睥睨して、宛も高僧の如くに立てり。これ豈開祖の手栽たるざるなきを得んや。幽徑登々、祠堂兀立す。英雄骨枯れて土に化するも、その呵雷役電の神魂は、長へに我が國民元氣の本尊たらんかな。

——精神の復興——

### 二四 大鳴門の眺

久保 天 隨

そも鳴門といふに二箇所あり。鳴門岬に近きは、大鳴門にして、小鳴門と呼ぶは、なほ北に數里を隔てて北泊のあたりなりといふ。さてこの海峡には、中ほどと思しき所に、廣さ數百歩なる平岩あり。中の瀬と名づく。これと並びて巨礁數を知らず。かく瀬の巖に續ける所は水底さまでならねど、その左右は俄に深くなりゆき、奈落の

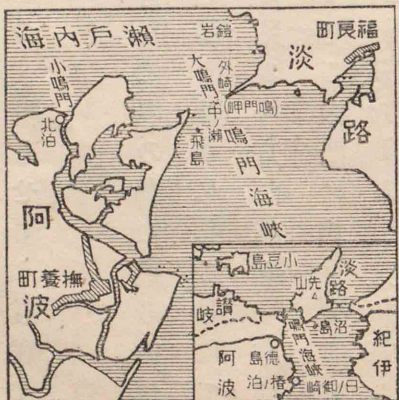
(三)淡路國の西端。  
(四)阿波國瀨戸村の大字。  
(五)鳴門海峡。

百仞 百尋 珠 特

(一)讃岐國大串村の北方海中。

末廣福に開く  
それかあらぬ  
渺漫あま  
ほのめく  
海士  
山輝水映  
午天の陽光

底に通ふか疑はれて、百仞にも餘れり。折しも銀潮満ちたふれば、巖ごもは沈みて見えわかず。遙かに讃岐の山々、小豆島などの霞みて見渡さるゝのみ。瀬より少し南に離れて、飛島とて殊に大いなる巖あり。形寶珠の如く、上には松なごねぢけて生ひたり。こなたの海は扇に似て末廣福に開き、阿波の椿の泊紀伊の日の御崎など、それかあらぬかど、ほのかに認められ、碧波渺漫として、はてもなく、目に遮るものにては、ほのめく白帆の影のみ。近きあたりには、海士の小舟を漕出でて、藻かり、魚釣などするもの多く、ここの波間には水を潜りてあさる鶉の鳥あらはれ、かしの岩根には翼休むる鷗あり。山輝水映の景色は、雲なき午天の陽光に一入の匂を添へて、うち見る限り、繪に



景趣

朝落ちよかし  
かしげなき我まつよめ  
たもめ

いとよくも似たりけり。もこより形勢の聞えあるこの地の、かく景趣はありながら、たゞこれのみにては殊に壯觀といふべくもあらねば、今や人々の久しく語り聞えし言の葉も疑はれて、早く潮落ちよかし。渦巻くさまはいかならん。なご咬きつ、瞬もせずうち守りてぞありし。

この時早く

なだれ落つ  
彈指の間  
水準

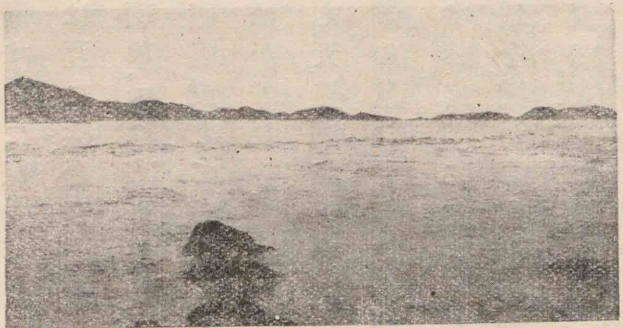
この時早く、海山いづくともなく鳴る音して、中の瀬の巖のあたりに、潮頭の崩るゝが見え初めぬ。これぞ退潮の始りししるしにて、外洋は早く引けども、内海は遅ければ、見る見る一方は高く、一方は低くなりもてゆきて、瀬戸海の水を傾けてぞこの門に集り來るなる。その疾きことは矢の如く、勢の凄じさは磐石の轉倒にも譬ふべきばかりにて、鎧岩を洗ひ、戸崎を衝き、更に横に折れて、かくは中の瀬よりなだれ落つるなりけり。この轉變は彈指の間に起りぬれば、拙き我が筆の力に及ばず。なほうち見てあるに、水準の差は六七尺

網代木

鼎の沸くが如し

驚瀾駭浪

狂奔馳逐す



にもなりて、海峡十餘町の間は全く瀧のさまを現じ、譬へば早川の

水の網代木にせかれてたぎるに異ならず。

瀬の巖の下なる深淵には、一たび落ちたる

潮の、又底よりくら／＼と煮えかへりて、さ

大ながら鼎の沸くが如く、忽ちにして盤渦を

生ず。その大きき徑三間許と見え、勢は緩や

鳴かなれど、さすがに怖しげなり。瀧の落つる

ここ烈しければ、驚瀾駭浪争ひ騒ぎ、盤渦の

門中に入るものは跡なくなりゆけど、外にあ

るものは狂奔馳逐して、後浪と前浪と相及

び相闘ひて潮頭を碎き、寄せては返し、行き

ては走り、輪旋すること百回にしてやまず、

遂に中心の凹みとなりて、又渦を作る。こは小さけれども巻くこと

轉拗す（一）のしまはす  
（一）支那直隸省順德府平鄉縣  
（二）支那河南省南陽府葉縣の南  
（三）漢劉秀二年、莽をここに破つた  
（四）西曆紀元前二〇八年、項羽大いに秦の軍をここに破つた  
（五）淡路國三原郡の南、鳴門海峡の南口東岸

甚だ急にして、その邊には必ず逆廻せるものを作りて、ひたすら轉拗するに似たり。かくて大渦、小渦の沸涌するもの數を知らず。はては互に揉合ひ、且現れ、且ふたがる。潮の愈、退くに隨ひ、瀨なる巖の尖頂愈、露れ來れば、亂濤、山の如く襲ひ進み、うち越えて輾落し、今は海底鳴動して、千輛の雷車一時に震轟するが如く、地軸も打拉（一）がれんばかりなり。碎けては散る波の花、萬顆の泡珠は長空に晴雪を飛ばし、天風潮氣を捲けば、巖上の松の梢に颯々の響あり。誠に瀬戸海の潮の息、たゞ半里の喉元に迫りて喘ぐなれば、かくなれるも理といふべく、見るさまの壯快にして、跌宕（一）なるは、鉅鹿の戦に殷聲呼んで地を撼かし、昆陽の役に百萬の兵を一撃に蹙（一）にしたるに比ぶべくもや。蛟龍も聳駭（一）すべく、鯨鯢も奔蹙（一）すべし。ここを覺ゆれ。まのあたり見る身は慄然（一）として、震ひつ、毛髮逆さまに豎ちて、そゞる寒きほごなり。ありし小舟のいくつは、遙かに福良の方に退き、鷗（一）なごもい

萬顆

颯々の響

跌宕なる

龍

四三〇  
八九十

ケイン

神驚き心死す  
 卓犖  
 胸宇を衝く  
 豪懷  
 天風に嘯く

づ方へか隠れぬ。折しも俊鷗一羽中空を輪に舞ひて、行者が鼻なる高巖の頂に下り、翰を収めて睨視するがありけり。時の遷りゆくまゝに、奔潮は益、怒りて、射注の勢終に止むべくもあらず。下りて飛鳥を衝き、餘流滔々として南に下り、海中明らかに一條の急川を馳せしむ。我等初のほどは神驚き心死して、面に血の色なきまでなりけるに、漸くに自ら蘇し、濶大卓犖の感の胸宇を衝くに方りては、豪懷物の譬ふべきにあらず。舟子に命じて試に我が船を渦の中に入れしむ。一葉軽くして水天と抗し、掀簸上下してめぐるさま、獨樂に等し。かの大渦に入るれば、一分時ならずして一旋し終り、小渦に於ても五分を出でず。渦の轉拗するにつれて、急川の裏に吐出され、流に乗りて下らんとすれば、急につゞ漕返し、又渦に入る。かくすること幾度なるかを知らず。その間、舷を叩きて天風に嘯き、身はすでに仙化せる思あり。舟子は棹をこゞめて、今はこれ初

飛箭弦を離る  
三原郡灘村の海上

魂魄波に漂ひ  
恍惚無何有の境にさまよふ

今はとて  
今はもう

大丸  
をさく

秋の頃にして、觀潮には好き時なれども、三月の大潮には瀧の高さ二間に近く、心も言葉も及ばぬばかりなり。われ等はよく險に慣れたれば、かゝる折を待ちてわざと舟を下す。そが潮にひかれて走るさまは、飛箭の弦を離れたるが如く、四里の海路も半時ならずして流れ下り、沼島のあたりに着くべし。なごいふ。かくいふ中にも潮の勢いやまして、いつやむべしとおもほえず。豪懷今は極りて、悽愴の感を惹き、魂魄波に漂ひ、恍惚無何有の境にさまよひて、夢も現ともわかざりけり。

さるほごに日も稍西に傾きて、五時頃とも思しきほごになりければ、今はとて舟を南に移しぬ。この時までありしかの俊鶺は俄にたちて、二度三度こなたを顧つゝ、南に飛びて、いつしか暮雲の中に跡を隠しつ。船は急川の裏に入りぬれば、一瞬千里の勢にて、富士川の川船にもをさく、劣らずや、時を移して、辛くも流の外に截出

(一)阿波國板野郡の町

欸乃

(二)淡路國津名郡 黯然

でて帆を揚ぐるに、ここは海面鏡の如くにて、追風さへそひければ、半時ばかりにして、撫養の浦近くなりぬ。かなたこなたに蒲帆斜に夕陽を孕みて、漁火欸乃の相答ふるも聞え、沼島のあたりには、紅霞一片たなびき渡りて、鳴門の海峽には、輕霧すでにたちこめたり。淡路島山もはや暮れかゝり、先山の翠は黯然として別を惜しむの色をなし、昨日杖を曳きたるあたりの忍ばるゝこそ、いこをかしかりけれ。

——時文軌範——

### 二五 生命の雄辯

永井柳太郎

グラッドストーンは曾て雄辯の秘訣を尋ねた一青年に書を與へて、次のやうにいつた。一、用語は平易を尊び、簡潔を選ぶこと。二、句も亦出来る限り短く切ること。三、發音の明瞭を心懸けること。四、批評家や反對者を待たずして自ら豫め論點を考檢すること。五、論題

87年  
Gladstone  
イギリスの大政治家、西暦一八〇九年—一八九八年

再思三考

に就き再思三考して十分に消化し、適切な語を迅速に拈出する練習をすること。六、思考を論題に集中し、常に聴衆を見守ること。しか

しこれ等のすべてが具備したからして、何人も直ちに雄辯家とはなれぬ。眞の雄辯家には、これ等の根柢に於て燃えるが如き信念がなければならぬ。大雄辯は畢竟するに、大信念の別名に外ならぬ。



グッドラントの演説

聖書に「たごひわれ諸の人の言葉及び天の使の言葉を語ることも、若し愛なくば鳴る鐘や響く鏡鈸の如し。」とあるのも亦この意味である。何等の信念もなく熱誠もない人が、徒に美辭麗句を連ね、わざとらしい身振をして、無用な辯を弄する時ほど、

Nietzsche  
ドイツの哲學者  
(西暦一八四四年—一九〇〇年)



ニイチエ

人に不快の念を興へ、反感を挑發するものはない。これに反して、その熱血熱涙の迸るものある時は、たごひその言語が訥々として居り、又その研究が不十分であつても、自ら聴者をして襟を正さしめ、感激せしめるに足るものがある。ニイチエはいはく「すべての書物の中、余はたゞ人が熱血を以て書きたるものをのみ愛す。熱血を以て書け。熱血は生命なればなり。」と。滿腔の熱血これを抑へんとして抑へ難く、一管の筆端に溢れたもの、そのまゝ、金玉の文字となつて、以て一世を風靡すると同様に、滿腔の熱血抑へんとして抑へ難く、三寸の舌端に發して、始めて鬼神を泣かしめる大雄辯となるのである。

この點より考へる時は、釋迦や孔子や、耶穌や、日蓮の如き大聖が、すべて雄辯の人であつたのは、怪しむに足らぬ。三界の大導師とし

(一)新約全書馬太傳第六章一節の鳥を見よ。空を飛ぶ鳥は、倉に取らぬ穀を養ひ給ふ。これの父は、天の然るに汝等、これの養ひ給ふ。これの父は、天の然るに汝等、これの養ひ給ふ。

(二)同「野の百合は、はいかにして育つかを思へ、勞せず紡がざるなり」

口舌の技巧

の體験  
精神の洗滌  
考ふ

て釋迦の生涯それ自身は不朽の大説教であり、孔子の言々句句も亦、すべて經世の大雄辯であつた。耶蘇の有名な山上の垂訓の如き、天の鳥を指して天父の慈愛を論じ、地上の百合を示して攝理の幽玄を説く。これを聞いたもの、いづれもその説くところの「學者等の如くならず、權威あるものの如く」なるに感歎したのであつた。日蓮の「立正安國」の叫、親鸞の「善を欲せず、又惡を恐れず。如來の本願に優れる喜なく、如來の本願を妨ぐるほどの惡なし。」と、善惡を超越した絶對の聲、いづれか又不滅の雄辯でないものがあらうか。しかもこれ等の大雄辯は區々たる口舌の技巧でなく、實に彼等大聖の崇高な信念と、深刻な體験と、聰明な叡智と、純眞な情熱から迸出し來る生命そのものの雄辯であつた。

政治家たるに必要な條件は種々あらうけれど、私はその最も大なるものは、第一に天地に通ずる不拔の信念、第二に社會の要求を

知るの聰明、第三に社會をして自己を理解せしめるに足る雄辯で



アトニの追申演説

(Shakespeare) イギリスの大戯曲家(西暦一五六四年—一六一六年)  
(Julius Caesar)

(Brutus)

あると思ふ。いかに不拔の信念を以て社會に臨み、能くその社會の缺陷を知つてこれを救はうと欲しても、社會が自己を理解せず、自己に聽従するを肯じない時には、到底その政治的理想を遂行することは出来ない。シエクスピヤはその著名な脚本「ジュリアス・シーザー」に於て、大いなる教訓を與へて居る。ブルータスはローマ人の自由の爲にシーザーを刺した。やがて外へ出て群集に對し、「シーザーを愛すること深ければなり」と叫ぶや、群集は歡呼してブルータスを迎

Antony.

へた。然るに彼アントニーがシーザーの血に塗れた外套を携へ來つて、これを群集の前に掲げ、まづシーザーがいかにローマの市民を愛したかを述べ、シーザーはその全財産をローマ人の市民に遺言を残したりして、ローマ人を感動せしめ、やがてその外套の血に塗れたところを指して、見よ、これシーザーが天使の如く愛したるブルータスの刺したるものなるぞ。ブルータスの短刀を追ひかけて、外に送り出でたるシーザーの血の痕を見よ。と叫ぶや、感動した群集は號泣し、激昂し、憤怒して、遂に戈を逆にしてブルータスを屠るに至つた。ブルータスが果してローマ人の自由の爲にシーザーを刺したか、ごうかは、歴史上の疑問であるが、假にローマ人の自由の爲に刺したのであるとしても、ブルータスはアントニーの非難に對し、能く自己の心事をローマ人に徹底せしめることが出来なかつた爲に斃れたのである。かくの如き事實によつても、民衆と

ともに民衆の爲に事を爲さうと欲するものは、自己を民衆に理解せしめるに十分な言論を必要とするのは明白である。

— 永井柳太郎氏大演説集 —

(一)大正十二年秋  
金澤市公會堂  
に於ける大震災  
記念講演

烏有に歸す  
焼けてしまふ

衷心  
まごころ  
皇天  
天をうやまつ  
ていふ語、又  
天帝  
使命  
いひつけられ  
たやくめ

(一)「悲哀の征服」(演説)〔自修文〕

永井柳太郎

諸君、九月一日の大震災は、その被害の大なる事におきましては、恐らく安政の大地震と明暦の大火とが同時に襲ひ來つた如きものがあつたのでありまして、これが爲に帝都の大半は烏有に歸し、百數十萬の人は家を焼かれ、二十有餘萬の人が壓死又は焼死したのであります。諸君等は全くその危険の外におかれて、一人の家を焼かれるものなく、一人の焼死ぬものなく、平穩無事に生活して今日にまで生きながらへて居られるといふことは、洵に諸君の大なる幸福でありまして、諸君はこの大なる幸福に對して、衷心から皇天に感謝するご同時に、生殘つたものの使命に就いて、眞剣に考へるところなかるべからずご思

①Martin Luther, ドイツのキリスト新教創始者(西暦一四八三年—一五四六年)

②Alexis,

③P Erfurt,

④Mansfeld,



ル テ ー ル

ふのであります。(拍手) 諸君等が一人も家を焼かれたものなく、一人も死ぬものなく安全に生活し、すべてがここに生残り居られるといふことは、決して偶然ではなく、これは皇天が諸君に對し、諸君にあらざれば爲すこと能はざる何等か重大な使命を諸君に與へて居る證據であるといはざるを得ないのであります。(拍手) 宗教改革の先驅者マルチン・ルーテルは、その親友のアレキシス(一)といふ者の死に遭遇して、自己の生活に大革命を起すほどの感動を受けたのであります。ルーテルは初め裁判官たることを志し、ドイツのエルフル(二)ト大學に於て法律を學びました。然るにルーテルはその大學生であつた時、一日その親友アレキシス(四)にも、當時マンسفエルトといふ所に住んでゐた自分の親もこへ遊びに行つた。終日遊び暮して、日没の頃將にエルフルト大學の寄宿舎に歸らうとして、圖らずも雷鳴に出會ひ、落雷の爲にアレキシスは慘死したのである。ルーテルは終日談笑をこもにした親友アレキシスが、屍となつて足下に横たはつたのを見て、非常に感動した。「アレキシスは今何所にあるか。彼はすでにこの世のものにあらずして、残るはたゞ宇宙の絶大無限である。自分は裁判官たることを志したが、いかなる大法官も、宇宙の絶大無限の前に於て、はた何の權威を有するものぞ。自分は區々たる世上の權威を慕ふべきでない。たゞ宇宙の絶大無限にのみ仕ふべきである。」と感じて、その親友アレキシスの死より得た大教訓に基づき、自己の生活をその根柢より一新し、斷然裁判官たるべき志を擲つて、宗教家たらんことを決し、直ちにオーガスチン派の修道院に入つたのであります。今我々が未曾有の大震災の爲、犠牲となつた數多の同胞の累々たる屍の間に立ちながら、その屍の間より出づる大教訓により、ルーテルに劣らざる敬虔の念と眞劍の心を以て、我々自身の生活をその根柢より一新し、ルーテルが人類の歴史に與へたるに劣らざる新紀元を與へることに努力しないやうなここでは、生残りたりといへども、しかも生残りたるものの特權を自ら放棄するものといはねばなりません。(拍手)

諸君、凡そ人間はそれに氣のついた人でも、氣のつかない人でも、必ず三つ

⑤St. Augustin,

神はたつまる  
フ、しま

のを見て、非常に感動した。「アレキシスは今何所にあるか。彼はすでにこの世のものにあらずして、残るはたゞ宇宙の絶大無限である。自分は裁判官たることを志したが、いかなる大法官も、宇宙の絶大無限の前に於て、はた何の權威を有するものぞ。自分は區々たる世上の權威を慕ふべきでない。たゞ宇宙の絶大無限にのみ仕ふべきである。」と感じて、その親友アレキシスの死より得た大教訓に基づき、自己の生活をその根柢より一新し、斷然裁判官たるべき志を擲つて、宗教家たらんことを決し、直ちにオーガスチン派の修道院に入つたのであります。今我々が未曾有の大震災の爲、犠牲となつた數多の同胞の累々たる屍の間に立ちながら、その屍の間より出づる大教訓により、ルーテルに劣らざる敬虔の念と眞劍の心を以て、我々自身の生活をその根柢より一新し、ルーテルが人類の歴史に與へたるに劣らざる新紀元を與へることに努力しないやうなここでは、生残りたりといへども、しかも生残りたるものの特權を自ら放棄するものといはねばなりません。(拍手)

諸君、凡そ人間はそれに氣のついた人でも、氣のつかない人でも、必ず三つ



の生存競争をして居らぬものはありません。三つの生存競争とは何であるか。第一は、動物對人間の競争であります。第二には、人間對人間の生存競争であります。第三は、自然と人間との生存競争であります。いかなる人でもすべて生きんと欲する慾望のある者は、この三つの競争から免れることは出来ないものであります。この三つの競争に於て、我々が勝利者となつて生きんとする慾望を貫かんと欲しますれば、何とすることも孤立した方ではこれに及ぶことは出来ないのであります。動物と生存競争をするのでも、人の協力を必要とします。人間對人間の生存競争も、文明の進歩するに随つて、次第にその範圍が大きくなつて、部落對部落の争は國家對國家の争となり、國家對國家の争は更に人種對人種の競争となつて、その結合の範圍を大ならしめて行くのであります。自然對人間の競争でも、人間は出来得る限りこの自然界に於ける色々な法則を發見し、その法則を人間の生活に利用するといふことに依つて、我々は生きるのであります。しかしてその自然界の法則を發見するに、種々なる學者の協力や、種

種なる技師の研究や、種々なる人々の勞力を必要とするのであります。この人間の間<sup>に</sup>於ける相互扶助の精神の最も大なるものは、最も大なる生活能力を有し、相互扶助の精神に最も乏しいものは、最も劣等なる生活能力を持つて居るのであります。社會學者の申しまするやうに、相互扶助の社會生活は、その社會生活それ自身が、生存競争に對する最大な武器である。互に相互扶助の精神を持つて、一人々々が自分の最上と思ふ勤勞をこの社會に捧げ、その一人々々の最上な勤勞が出来ただけ大きく結合せられ得るならば、その社會は最も大なる生活能力を有するのであります。この結合力の乏しい社會は、生活能力の最も少きものであるといはなければならぬのであります。故に國家としては、すべての人をして、精神的にせよ、肉體的にせよ、その人の最上の勤勞をこの社會に致さしめると同時に、すべての人をしてその最上の勤勞に對して、その生活を保障するに足るだけの報酬を得しめることが、その生活の大本でなくてはならぬのであつて、若しこの根本精神を蹂躪致しまして、たゞ自分の屬して居る一つの階級の故に、自分の屬して居る一つの黨派だけの爲に、すべての人

の生活の安定を奪ひ、すべての人のその最上の權利を社會に致す自由を興へることを拒むやうなものがあるに致しますれば、かくの如き人は、社會共存の大義に對する大なる反逆者であるといはざるを得ないのであります。(拍手) 今までの教育に於て、私は一つの大なる缺點があつたと思ひます。それは、生きんご欲せば人ごにも生くべし、學ばんご欲せば人ごにも學ぶべしといふこの大精神を忘れて、たゞ一人お前だけ偉いものになれ、たゞ一人お前だけ金持になれといふやうなことが教へられて居つたのであります。お前は誰よりも賢明になれ、お前は誰よりも偉いものになれと、その一人だけを外のものから全然卓越した地位に置かうとする教育が、これまで一般に行はれて居つたのであります。汝生きんご欲せば人ごにも生くべし、學ばんご欲せば人ごにも學ぶべしといふこの精神を達成せしめる下に於て、足らなかつたところが非常に多いやうに思はれるのであります。(拍手) この度の大震災の經驗に依つて見ましても、己一人がいかに賢明であつても、周圍が暗愚であれば、ごにも亡びざるを得ない。己一人がいかに正義であつても、周圍がすべて不正不義であれ

ば、自分ごにも死なざるを得ないのであります。今日は世界各國に於きまして、外國に對する根本の思想は、自分の國のみ卓越して他國を征服するといふことではなく、自分の國も富むと同時に他國をも富ませ、有無相通することに依つて、互の幸福を増進しなければならぬといふことが根本の思想となつて、世界の外交を動かしてゐるのであります。

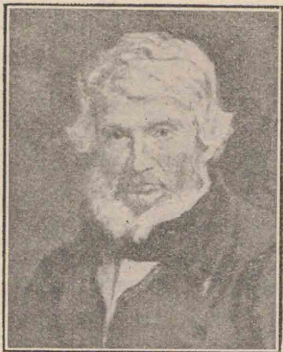
この度世界大戰の爲ドイツは無殘の敗北を遂げたので、聯合國から一千三百二十億金馬克、即ち日本の貨幣に換算して六百六十億圓の支拂を命ぜられて、實に四苦八苦の苦みをしてゐるに拘らず、ドイツ人は少しもその爲に絶望しない。ドイツは必ずこの苦みを征服して、再び世界の國民の中にはいることが出来るに信じて居るのであります。その労働者の如きも、日本のやうに單純に労働時間を制限せよなどいふことをいつては居らぬ。彼等は八時間労働は規定せられて居るけれども、その八時間労働の上に約三時間乃至四時間の愛國労働をやる。さうして我々労働者自らの愛國労働の力によつても、ドイツを亡國から救ひ出して見せるといふ動かし難き信念を持つて奮闘して居るのであります。

して、私はこのドイツの労働者が自ら國家の運命を双肩に擔うて、自己の愛國労働の力によつてドイツの富を増加し、ドイツの國運を挽回せんとする健氣な精神に對しては、滿腔の敬意を表せざるを得ないのであります。(拍手) この點に於て、私は日本の労働者のみならず、一般の人も亦、自らの勤勞によつて國家の運命を擔ふといふ精神が足りないやうに思ひます。(拍手)

我々の帝都は九月一日の大震災の爲に煙となつて、消失してしまつた。その時に遺されたものは何であるか。凡そ目に見えるところのすべてのものは破壊せられ、傷つかずして遺されたものは殆どないのであります。しかし、唯一の完全に残つて居るものがあります。何であるか。これは人間の精神的及び肉體的勤勞の力といふものであります。(拍手) この精神的及び肉體的勤勞の力そのものは、なほ依然として存して居るのであります。精神的又肉體的勤勞の限りを各が奮ひ起して、そして出來得る限りの大なる且尊き貢獻をこの社會に捧げますならば、そのすべての人の尊いところの勤勞によつて、廢墟の中から新しい文化の生まれ來ることは、信じて疑はないのであります。私は復興

Thomas Carlyle.  
イギリスの文學者、歴史家。  
(西曆一七九五年—一八八一年)

の業の容易にあらざることを思ふ時に、彼のカーライルの勇氣を想ひ起さざるを得ません。カーライルは半生の心血を注いで、彼のフランス革命史を書きました。それはカーライルが日夜寢食を忘れて執筆したものであつて、實にカーライルの苦心慘憺の産物でありました。然るにその原稿を見せられた友人が、



カーライル

是非一讀したいと申し出たので、カーライルはこれを拒むに由なく、その友人に貸與したのであるが、その友人がその原稿を椅子の上に亂雑に讀殘したまゝで寐した後で、翌朝女中がストーブに火をつけようとしてその室にはいつて來て、何心なくその原稿を他の紙屑とともにストーブに投げこんで、たきつけさせた。カーライルは自己が心血を注いで漸く脱稿したばかりの原稿が、僅かに一日にして燃失せたといふことを聞いた時に、殆ど失神せんばかりに驚いた。否それを聞いてから數日間は、殆ど失神した人の如くであつた。しかし彼は全身の勇氣を奮ひ起した。そして叫んだのであります、「汝、世界を

征服せんと欲せば、まづ汝自らの悲哀を征服せよ。と。カーライルは再び参考書を集め、再びペンを執り、その原稿の第一頁より書始めて、最初のフランス革命史に優るフランス革命史を書終へたのであります。我々はフランス革命史を繙く時に、常にカーライルの熱血熱涙がなほ我が脉管に波打ち來るが如き感激を覺えます。我々も亦カーライルがその全身の勇氣を奮ひ起して再びフランス革命史に筆を執つた如き勇氣を奮ひ起して、帝都復興に當らねばならぬと信ずるのであります。(大拍手)

——永井柳太郎氏大演説集——

二六 あゝ大東京

西條 八十

少年の日

私の手飼の小鳥は

野良猫に噛殺された。

古びた籠のほごりに

落ちてゐた美しい小羽根を、

私は幾日間飽かず眺め流涕したところか

そのまゝの傷ましい思を、あゝ東京よ、

私は今お前の上に感ずる。

むごたらしくも引裂かれた殘骸よ。

散亂した羽毛よ。

あゝ、永遠に逝きて返らぬものいとしさ——

その上に、大輪の月は夜々

白紙のやうに蒼ざめてはのぼり、且沈み、

私はきのふもけふも寂しく、

飢ゑた獸の如く彷徨する。

人種  
Gipsi.

たゞ見る、茫乎として天空に連る褐色の焦土。  
ごころく、黒く、丘の如く横たはる壊れた土藏。  
煉瓦壁、燻れる金庫――

又ジフシーのそれに似た亞鉛張の避難小屋――

さうしてこの雉子も啼かぬ焼野原を

點々木瓜の花の如く彩るは、

罹災民の食ひさした西瓜の皮だ。

けふ晝私は旅人のやうに草鞋がけでこの野を過り、

被服廠あとに山と積まれた

赤大根のやうな無慘な焼死體に、

心ばかり野菊の花を手向けて來た。

そのかへり途神田橋畔に

私は天空を晦くして低飛する燕の大群を見た。

彼等もやはりその時を失つたのだ、

大なる包を背負つて

薄暮の街頭を右往左往する人々をひとしく。――

だがもう秋だ。

時を失つた渡鳥は日ならず海の彼方に、

温い住家を搜めても行くであらう。

けれどもあはれな人の子は、この糧をも褥をも持たぬ

市民等は――

黄昏疲れて郊外の我が家に戻れば、

ここは又別世界に似た静けさ、しめやかさ。

一本の蠟燭の下に家族等はつごひ、

さゝやかな夕餉ゆふくを認めてゐる。  
何もかも舊のまゝだ。

白晝路傍に觀たあの痛ましい大景は、  
つひに一箇の幻ではなかつたらうか。

けれども耳もこの事實が直ちにその明るい疑念を裏切る。  
京橋の家を焼かれた兄夫婦が、

この春盲めくらひた老母に、暗い一隅でかう話しかける、

「お母さん。私たちももう二度とあの東京は見られませんよ。  
あなたと同じことですよ。」

一同は愕然おどろとして、覺えず箸の手を止め、

一齊いっせいに落ちくぼんだ老母の眼窩を見つめる。

① さうしたその睫まぶたのかげに秘められた

孔雀の彩羽さいうのごと燈火かどうるはしいきのふの都會の縮圖に、  
かぎりない哀慕の念をよせる。

—憶大東京—

二七 百 花 誘

大町 桂 月

郊原一路満目すべて薄うすなり夕陽沈まんとして、雲色哀しみ、西風  
冷やかにして、酸かたしたる鳥聲秋の恨を語る。馬の嘶なげく聲まづ聞え、小歌  
聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背うまのせにあり。手綱は鞍にあづけた  
るまゝにて馬の自ら歩むは、熟せる路にや。鴉から飛びつくして四面寥ひそ  
廓くわくたり。ふと願れば、招く尾花の末に、一團の大月明らかなり。

雀の聲滑なる冬の日和、日影暖に圓窓を射て、火鉢の火も消えか  
かれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣しよくきなき畫幅の下、水仙三つ

點塵

局に對す  
子を下す

茅屋  
桔槔はねつこ  
機杼はたおり

水榭  
人籟

流るとしもな  
き  
流鶯 免吾ノ

四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁  
丁として響く。

桃花數株茅屋を圍みて鷄聲午なり。桔槔動かずして一犬門外に  
眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲とともに洩來る。

一泓の池水、半ばこれ蓮花、白や、紅や、影を水に落して、水に花あり。  
健鯉時に躍りて、波紋岸に及ぶ。水榭深く鎖して、人籟なし。曉煙垂柳  
をこめて、日未だ昇らず。

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなたは小  
徑、行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を着けたり。流鶯時  
に一聲、思ひがけずも、大輪の花ぼこりと水に落ちて、水暫くは文を  
なす。

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世音の石  
像、頑として物いはず。側に生出でたる幾莖のをみなへし、なよ／＼

として風にもだゆ。

同伴なくて詩を思ひつゝ、たゞる山路、到る所櫻花多し。春風一陣、  
空に晴雪を散らし、地に綾の筵を敷く。

池畔の掛茶屋、少女欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。稚兒立ちて麩  
を投ぐ。棚上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。

麥浪に連る一面の菜花、菜花や黄、麥浪や綠。滿地みな色あり。行人  
絶えて遊絲のどこにか、一、一双の胡蝶追逐し、去つて行く所を知  
らず。

夏の日暑く、山路嶮しく、喘ぎ／＼のぼるに、渴を催して堪難き時、  
水音聞えていさうれしく、荆莽を排してこれに就けば、急湍清玉を  
迸らす。一掬、二掬、三掬。漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑  
なる巖の上に、百合の花危げに立てり。折らんと欲して折るに忍び  
ず。立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花、涙を含むが如し。

陽天  
野馬

喘息

麥浪 畑  
遊絲 かけろう

荆莽  
清玉を迸らす

空を挾む

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き堤の上、往きかふ人なし。巨蟹はひいでて、泡を吐きつゝ、蓋を擧げて空を挾む。

馬に食ません料こにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸り行く田舎少女。知りてか、知らずか、その草の中に桔梗一枝まじれり。

鸚鵡語り盡して日暮れんとす。人を待てどもいたらず。蕭々たる細雨庭の秋海棠に灑ぐ。

——春草秋草——

### 二八 實體實相

松 浦 一

すべて物の實體實相は、全部を解放したところにあり、區別を超越したところにありまして、それから生じて來る實體實相の威嚴は、想像するに難いことではありませんが、その例證に、私が非常に

(一)伊勢の歌人、  
彦根侯井伊直  
弼に擯用せら  
れた。文久二  
年(一八五二)  
八月、歿。年  
四十二。

面白く感じた和歌の話を擧げて見ませう。

長野義言の「歌の大武根」に、或尼が盜賊に縛られながら和歌を詠んだところが、盜賊はその和歌にひどく感動して、奪つた物までも返して逃げてしまつたといふ奥ゆかしい話があります。

近き頃彦根に慈門といへる尼、若くて世を遁れ、里根といふかたはしなる所に庵を占めて住みけるに、一夜盜人ども忍び入りて、尼をからめおき、物など奪はんこせしに、尼からめられながら詠みける、

よし垣ももとは難波のあしなれば

こすもここわりよるのしら波

この歌を聞きて、盜人ども尼をもゆるし、物みな返して、出でいけり。意は、世を遁れ來て棲める庵のよし垣も、元は難波の浦に生ひたる蘆と同じ類のものなれば、今宵しも白波の越えて入りし



真髓  
感得

は理なり。かゝれば身は遁れても、世を隔つる垣はなきぞと感  
 諦めたるを、情深くあはれに言ひなしたるにて、これも詞には盜  
 人すなごいへるならねども、同じ世にふる人なれば、いかでか感  
 じ實にもご思ふ心なからん。ここの白波は盜人の事なり。  
 日本文學に歌の徳が靈妙な力を現すごいふ話が澤山あり、また  
 これを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔から文學に一種  
 の神性を感じ、そこに靈的の意味を理解することが一般に出來て  
 ゐたごいふことを示すものでありますから、この點だけでも、文學  
 的に日本人は世界に誇るべきことが出來るのであります。それは文學  
 といつても、歌にござまるのではないか。ごいふ人があるかも知れ  
 ませんが、詩歌は文學の真髓であります。歌についてこれだけの感  
 得が自由に出來れば、十分であります。この點については、明治に始  
 った新日本の日本人は、却つて舊日本の日本人よりも、文學的に墮

朴直

落して居りはしないかと思はれます。理窟をいふことを知らずし  
 て、率直に物の精神に觸れることの出來たのが、舊日本の特色であ  
 ります。理窟をいふことは巧になつたけれども、朴直と親切と、隨つ  
 て物の精神を真に感じ、全心を傾注して事物を尊敬し崇拜するこ  
 とが出來なくなつたのが、新日本の遜色であります。  
 さてこの歌の貴いところは、限界が固りついでるこゝ浮世の垣を、  
 そのまゝに僧庵の周圍に取周らしたものであるから、俗縁を斷つ  
 たご思うてゐた身でも、やはり俗縁に繋がれてゐた。俗縁に繋がれ  
 てゐる者が、俗縁で盜賊にはいられても、致方ない次第であるご悟  
 つたその一つの悟にあります。この悟にはいつてしまへば、垣を結  
 んだのがすでに誤である。厄は縛られても盜人を怨まない、又盜人  
 に盜みをするなご訓戒もしない。その怨まず、戒めず、自己の心の垣  
 を撤して區別もなく、區劃もなく、一切を解放して分つごことも出來

心の垣を撤す

ず、集ること出来ぬ自分といふものの實體を抛げだしたところに、賊を威壓し、我々を威壓する力が生じて来たのであります。かういふ例は、たゞ歌の徳といふばかりではありませんから、高德の上人の間には、これに類した話は澤山ありませうが、要するに、一切のものも、この實體實相と威嚴との境涯まで行かなければ、未熟でなければ虚偽であると思ふのであります。

——文學の本質——

二九 みやびの物語

一 秋の青柳

橘 成 季

源有仁  
表座敷

花園左大臣家に始めて参りたりける侍の名簿のはしがきに、能は歌よみ。と書きたりける。おとご、秋のはじめ南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしけるに、暮れければ、下格子に入参れ。と仰せられけるに、藏人五位たがひて、人も候はず。と申して、この侍参り

たるに、汝は歌よみな。とありければ、かしこまりて、御格子おろしざして候に、このはたおりをば聞くや、一首つかうまつれ。と仰せられければ、青柳の。とはじめの句を申し出したるを、さぶらひける女房たちをりに合はずと思ひたりげにて、笑ひ出しければ、物を聞きはずして笑ふやうやある。と仰せられて、こくつかうまつれ。とありければ、

青柳のみぎりの絲をくりおきて

なつへて秋ははたおりぞ鳴く

と詠みたりければ、大臣感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出して、賜はせけり。

寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにし雁がねは

今ぞなくなる秋霧のうへに

宇多天皇の時  
の年號  
紀友則

こよめる。左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人  
こゑに笑ひけり。さて次の句に、「かすみていにし。」といひけるに  
こそ、音もせずなりにけれ。同じここにや。  
——古今著聞集——

二 王子猷

昔、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひにほだされ  
ずして、たゞ春の花、秋の月にのみ心をすましつゝ、多くの年月を送  
りけり。事に觸れて情深き人なりければ、かき曇り降る雪はじめて  
霽れ、月の光清くすさまじき夜、一人起きゐて、慰め難くや覺えけん、  
高瀬船に棹さしつゝ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙  
かにて、夜も明け月も傾きぬるを、本意ならずや思ひけん、かくとも  
いはで、門のともより立歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、  
もろともに月見んこそ思ひつれ  
かならず人に逢はんものかは

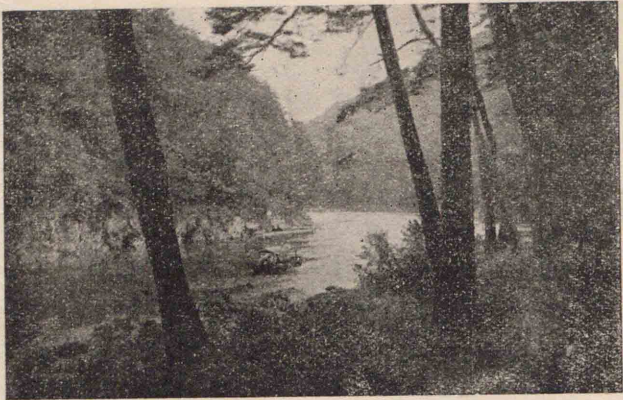
高瀬船  
本意ならず

とばかりいひて、遂に歸りぬ。心の好きたるほどは、これにて思ひ知

るべし。戴安道は剡縣といふ所に住み  
けり。この人の年ごろの友なり。同じや  
うに心をすましたる人にてなん侍り  
ける。  
——唐物語——

三 三船の才

一年入道殿の大井川の逍遙せさせ  
給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船  
と分たせ給ひて、その道にたへたる人  
人を乗せさせ給ひしに、この大納言殿  
のまわり給へるを、入道殿かの大納言  
いづれの船にか乗らるべき。と宣はすれば、「和歌の船に乗り侍らん。」  
と宣ひて詠み給へるぞかし。



大井川

(一) 藤原道長、  
京都の西嵐山  
の下を流る  
上流を保津  
川、下流を桂  
川といふ。  
(三) 權大納言藤原  
公任

申しゆく

をぐら山あらしの風の寒ければ

紅葉のにしききぬ人ぞなき

申しゆく おぼしなごれん、かひありて 遊ばしたりな御みづからも宣ふなるは、作文の船にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば、名のおがらんことも勝りなまし。口惜しかりけるわざかな。さても殿の、いづれにぞか思ふと宣はせしになん、われながら心驕せられし。と宣ふなる。ひと事の優る、だにあるに、かくいづれの道にもぬけいで給ひけんは、古も侍らぬことなり。 — 大 鏡 —

三〇 日蓮上人

高山林次郎

この世の中で眞に偉大な事業といふのは、何も戦争に勝つたり、國を取つたりする事のみではない。少年の心には、こかく頼朝や太閤のやうに、天下を取つたり、外國を征伐したりするのが、眞に英雄

覇權

Aristotles

有名なギリシヤの哲學者。(西曆前三八四年—三三二年)

Jesus Christ

(三)とも地名。

野心家 あつたしらみ

の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、さほどに尊ぶに足らぬ事のやうに思はれるであらうが、これは大いなる誤である。敵を征服し城を屠る事も難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までもその勢力を有することは、人間の事業として、は更に大きく、又更に尊むべきことではあるまいか。アレキサンダー大帝の遺業も、ローマ帝國の覇權も、その時々々の榮落に過ぎずして、今日に於ては何の跡形もないが、アリストートルの學術や、キリストの教は、今日もなほ昔の如く、人の心を支配し感化してゐる。春秋戰國の王霸の争も、支那の歴史に空しい文字を留めたばかりであるが、その當時に陳蔡の野に飢ゑた孔子の教は、今もなほ東洋文明の根據となつてゐる。世にはゆる英雄豪傑の事業は、壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしめる外に、多く後世に影響を與へるものではない。これを喩へるならば、ちやうど仕

快哉を叫ぶ

掛花火の、一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばれるが、間もなく消去つてもこの暗黒に立ちかへるやうなものだ。これを文藝や宗教の勢力の深大にして且永久なるに比べれば、事業の價值いづれが大なるか、自ら明らかであらうと思ふ。されば英國の哲人カーライルは、イギリスが一人のシェークスピアを有することは、印度帝國を有するよりも尊いと言つた。

情操

又人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、その思想が高尙で品性尊く、且意力情操の絶大純潔な人を謂ふのである。そのいはゆる英雄豪傑と呼ばれる人の中には、その表面の仕事こそ人並以上に大きい、その品性のこれに伴なうて高潔なのは極めて乏しい。つまり彼等の多くは、境遇の幸であつたが爲に、おのれ眞にこれに當るべき才器品性がなくして、偶然に大事を成遂げたものが多い。例へば、高山の上に吹上げられた種子がそこに生長して、亭々とし

東家西家

時勢の寵兒  
はなせの人

て天際に聳えるやうなものである。若し禪一貫の赤裸にして突出したならば、東家西家の權兵衛、八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは、いはゆる時勢の寵兒であるからである。

日蓮上人はその人物に於ても、その事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。

(一)千葉縣安房郡  
天津町の北  
山上に清澄寺  
がある

故山

大覇府

まづその事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼より出家して清澄山(一)に上り、後叡山に學び、十二年の遊學の後、當時に行はれた佛教諸宗門の、いづれも教祖なる釋迦の眞意に違へるものなることを悟り、その故山に歸つて始めて法華の新宗門を開いたが、聞く者皆狂として取合はず、却つて在來の宗門を罵詈雑言のを怒つて、彼を殺さうとした者すらあつた。日蓮は遁れて鎌倉に到り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝ、あるこの大覇府の大道に立つ

(一)日蓮の四箇の格言、念佛無間、禪天魔眞言亡國、律國賊、相模國鎌倉郡龍口寺の地かといふ

非はかたきかてせのりぬ

軀ミミラズルヲロ、トハ

宣傳 生死の間に出入す

て、念佛者は無間地獄に墮つべし。禪は天魔の業ぞ。と大呼したので、執權北條氏の怒に觸れて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、その間、暴民の爲に庵室を焼かれたり、龍口に引かれて首斬られようとしたり、敵人に要撃せられて命を落さうとしたり、その他、刀杖瓦石の災難その數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖るに違なく、生疵の身に絶える間は殆どなかつたこの事である。

日蓮の受けた迫害は實に慘酷極つたものであつた。そしてその時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。彼は長い二十二年の間、絶えず自己の信じた眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなかつた。常に「この臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり。」といひ、たとひ日本國の位を以て誘ふことも、父母の頸を切らんと脅すことも、我は決してこの眞理をば捨てじ。その外



—野田九浦筆—

呼號す

(一)淨土宗の開祖

源空のこと

建曆二年(一

八七二年)寂

年七十

(二)眞宗の開祖

本願寺の開基

弘長二年(一

九二二年)寂

年九十

介然孤立

法鼓

ヒツクク

シマククク(佛)

佛託とそそかせる

更なる憂懐を折る

仍せしむ

の大難は風の前の塵なるべし。と宣言して、天下何恐るゝところなく、憚るところなく、聲の根の枯れない限り、筆の毛の續く限り、正々堂々と天下に呼號した。法然や親鸞のやうに、朝家權門の知己があるのではなく、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧侶を敵として、折伏の法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼びはり、僅かの小島の主と卑しんだその態度の雄々しさ、男らしさは、實に我が邦の歴史に類例のない事であつた。

古人の語に、「二義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目なり。」といふことがある。日蓮は二十二年の長い一ヶ月の間、常に生死の間に出入しながら、その眞理を信奉せる法華經を説いた。これほどの眞面目が又と世にあるであらうか。されば天も人も次第にこの至誠の聲に靡いて、その教は漸く都鄙に擴り、淨土、禪宗の僧侶とも追々と改宗して、念佛の代りに唱題の響がだん／＼と高くな

唱題の響がだん／＼と高くな

お陰

つた。北條より足利の時代になつてからは、この宗門の勢は益々盛大となり、戦國時代にあつては、天下の寺院のうちで、法華その半ばを占めたこのこと。今日では眞宗の全盛に壓倒せられたが、それでもなほ日本國の大宗門たるを失はぬ。これ皆日蓮の遺業の餘澤である。

それで日蓮の人物はごうであるかといふと、決して世人の多く信ずるやうな強情我慢一方の人ではない。七大寺の寺塔を焼拂ひて、彼等の頸を由井ヶ濱に斬らずば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言したあたりは、實に辛辣激越の極みではあるが、その裏面に温潤玉の如き愛情が、春の泉のやうに溢れて居つた。夫婦の愛情に對しても、常に深厚な同情を寄せ、孝順の情に至つては、實に後人を感動せしめるに足る美蹟を遺した。即ち六十近い老境に至りながら、なほ父母を懷慕するの情に堪へず、身延(一)の山に引籠つてからも、毎日五

辛辣激越  
はげし

(一)身延山・甲府  
市の西南九里  
高さ三七〇〇  
尺

てまかしつぼう  
びそそのう

十餘町もある險山を攀登つて、遙かに生國房州(レ)の空を拜んだといふことは、實に孝行の鑑といふべきではないか。これが一月、二月の事ではない、雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたといふに至つては、眞に驚嘆の外はないではないか。かういふ慈悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。これを要するに、上人は知識に於ては、當時のいかなる碩學にも匹敵し得べき、深大な素養を有し、又その威力に於ては、生死を顧ずしてその信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、又その感情に於ては、温潤閑雅いはゆる大丈夫の俠骨は、婦女子の柔腸を妨げざる底(二)の人情をもつたのである。

勇猛心

…底の…

——楞牛全集——



霧の身延〔自修文〕

田山花袋

(一)身延山の西、  
跪坐  
ちやんとすわ  
ること。

激湍  
岩に突當つて  
流れる早瀬。

(二)日蓮宗の總本  
山。甲斐國南  
巨摩郡身延  
山の南西に在  
る。弘安四年  
(一七四二年)  
創立。日蓮上  
人九年間幽棲  
の地で、その  
骨を埋めてあ

あそこが身延の奥の院のある所だといふ山には、赤く薙いだ所があつて、その上には面白いひよろ松が列をなして並んで生えてゐる。私はけふそこまで行かうと思つてゐる。都合がよかつたら、そこから七面山の奥まで行かうとも考へてゐる。私は舟の中に跪坐して、その山の近づいて來るのを眺めた。  
波木井に來て私は舟を乗捨てた。しかしそこは寂しい村で、午飯を食ふやうな家もない。仕方がないから、私は空腹を抱へながら、身延の町へ志した。  
波木井川に沿つて上つて行く路は、ちよつと鮮な明るい感じがする。激湍のさまもよければ、溪の屈曲してゐる形も見事で、釣橋などが架つてゐる。やがて久遠寺の最初の山門が大きく前に現れて來た。  
多いといふほどでもないが、杉の大木が所々にあつて、それが到る所に涼しい蔭を作つてゐる。橋を渡つて、石ころのごろ／＼する歩きにくい路を五六町行くこゝ、やがて寂しい身延の町が見えだした。  
有名な寺のある町といふよりも、山の町といふ感じを私は一番先に受けた。

翠微  
山氣で青く霞む所。

(一)小笠原長生、  
海軍中將。

耳の立つた和犬、指物師の店、乾物屋、汚い旅館、暢氣さうに子供をおぶつて立つてゐるおかみさん、何年も挽いたことのないやうな壊れた車、さういふものが歩いて行く私の眼に映つた。それに町はS字形に折曲つてゐて、それを過ぎると、上に高く杉の森と山の翠微を背景にして、久遠寺の山門が高く町に臨んでゐる。

旅館に休んで、大急ぎで午飯を済ました。床の間には、小笠原子爵の「ありがたや御法の風に拂はれて、心にかゝる浮雲もなし。」といふ歌の軸が掛つてゐる。日蓮の修行地——さういふ感じがどこもなく私の胸に迫つて來た。

日蓮は私はさう好きでない。私は佛教に對しては、もつと／＼古い所にあこがれてゐる。社會を相手にした僧よりも、自己の苦悶と戦つた僧たちの方がより多く私の胸に觸れる。しかし日蓮が晩年この山に來て、寂しく一人苦行を積んだことは、私の心を動かさずには置かなかつた。

私は急いで出掛ける支度をした。奥の院まで五十町、そこまでは是非行かなければならない。かう思つて私は出掛けた。もう時計は四時に近い。それに宿

を出る時には、今まで晴れてゐた空が曇つて、凄じい黒い雲が、一面に蓋をす  
るやうに蔽ひかゝつた。奥の院のあるといふ山の上には、特に雲が凄じく暗く  
かゝつてゐる。「お山は雨だな。こんなことを誰かがいつた。

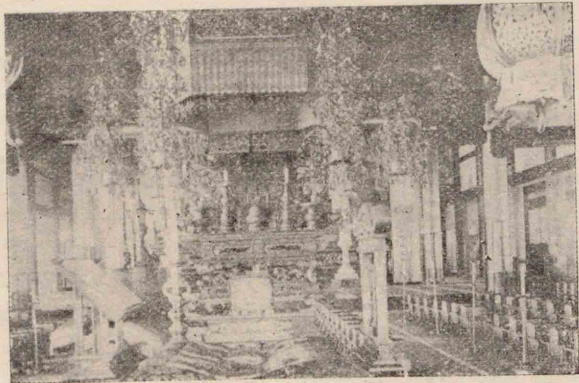
長い石段を喘ぎ／＼登つて、本堂から奥の院の方へ行く路に入つた時には、  
雨はもうほつり／＼落ちて来て、林の中は俄に暗くなつて行つた。杉、梅、落  
葉松、さういふ木の林の中を、路は縫ふやうにして、次第々々に上つて行く。  
こちらの山の背から向ふの背に行つた時には、深い谷が一瞬の下にひらけた。  
それは早川の谷と富士川の相合する所である。霧と雲は附近の山々から湧くや  
うに渦巻き上つて、見るが中にさうした光景はその中に包まれて行つた。

身延の山、奥の院、それは誰でも行く所である。女、子供でも行く所である。  
しかし私はそれを深い霧と凄じい風の中に登つた。私は長い間誰一人にも逢は  
なかつた。三光院(一)に着いた頃には、雨は、ごしやぶりになつて、霧で一閃先も見  
えぬくらゐであつた。いろは四十八曲を通つた時の凄じさは、今でも私の眼の  
前にある。登つて行くに連れて風は強くなり、雨は烈しくなり、霧は深くなつ

一瞬  
ひとめ。

(一)久遠寺の末寺。

水屋



久遠寺本堂

た。或岩角では颯風(たふゆ)に遭つて、私の蝙蝠傘は危く松茸のやうになつてしまはう  
とした。さすがに日蓮のゐた山だといふやうな気がした。荒山、實際荒山であ  
る。社會と闘つた日蓮は、更にこの大自然とも  
闘はうとしたのである。私はこんなことを思ひ  
ながら歩いた。一步は一步より峻しく、岩角か  
ら岩角へと路はついて行つた。時計を見ることも  
う五時半である。五十町、それくらゐの路はわ  
けはないと思つて来た私も、いつの間にか思は  
ぬ時間の経つてゐることに驚いた。三十五町の  
標木は、もう少し前に過ぎて来た。

雨は雲霧を破つて、所々縞(しま)のやうに見える。  
山の嶺の樹木は凄じく鳴響いて、天地の神秘が  
何か凄じい物を私の前に見せるかと思はれる。一町、二町、五町。お水屋に行  
つた時には、もう日はすつかり暮れて、ほの明るい薄暮(はくぼ)の光が、微に霧の中に

残つてゐるばかりであつた。やがて四十五町の標木を過ぎた頃、ふと私は耳を  
 欵てた。「ドンドコ、ドンドコ——」お題目の音である。それを聞いた時の崇高  
 な感じを私は今でも忘れることが出来ない。深い雲霧の中に、凄じい暴風雨の  
 中に、こんな山の上にさうした勤行ごんぎやうをしてゐる人たちのことが、急に胸に迫つ  
 て來た。

平日なら何でもないであらうが、深い霧と雲の中では、堂も杉も山門もすべ  
 て他界の光景のやうに私には思はれた。寂しい庫裡くらの中にある尼、圍爐裏の火  
 を赤く燃してゐる小僧、暗い本尊の前にちら／＼する蠟燭、それはすべてベル  
 ギーの作家の舞臺面を私に思はせるに十分であつた。私はやがて庫裡から奥の  
 院の方へへ行つた。そこには日蓮が始めて亡親(一)を思つたといふ遺蹟があつた。  
 奥の大きな堂には開かぬ大きな屏があつて、お題目の勤行の音はそこから四邊  
 に響いて聞えた。霧は白くあたりを流れた。

(一) マーテルリン  
 クのこと、リッ  
 ルギーの神祕  
 劇作家、(西  
 曆一八六二年  
 (二) 思親閣、また  
 思堂といふ、か  
 ら遙かに生地  
 の房州小湊を  
 拜して両親を  
 思慕した跡と  
 傳へる。

帝國新讀本 卷五 終

吉岡久人

花袋全集

大正十三年十一月三日印 刷  
 大正十三年十一月六日發 行  
 大正十四年二月十二日訂正再版印刷  
 大正十四年二月十四日訂正再版發行

(本 讀 新 國 帝)

定 價	
自卷一	各金四拾八錢
卷二	各金四拾參錢
卷三	各金四拾貳錢
卷四	各金四拾貳錢
卷五	各金參拾七錢
卷六	各金參拾七錢
卷七	各金參拾七錢
卷八	各金參拾七錢
卷九	各金參拾七錢

大 度	
自卷一	各金八拾六錢
卷二	各金七拾七錢
卷三	各金七拾七錢
卷四	各金七拾七錢
卷五	各金七拾六錢
卷六	各金七拾六錢
卷七	各金七拾六錢
卷八	各金七拾六錢
卷九	各金七拾六錢
年價	各金六拾七錢

修道中學校

第參學年用

編 者 芳 賀 矢 一



吉岡

發行所 兼 印刷者  
 代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬  
 印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場

發行所

東京市神田區通 神保町九番地

合資會社

富山房

電話 大手六三七〇番  
 振替口座東京五〇一番

庫

25

643

広島大学図書

2000038643

